

矢詰遺跡 発掘調査報告書

工場建設用地の造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

新発田市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、新潟県新発田市奥山新保字矢詰 406 番 1 ほかに所在する矢詰遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、工場建設用地造成に伴うものである。グローバルビッグファーム株式会社の委託を受け、新発田市教育委員会が主体となって、平成 23 年 5 月 17 日から 7 月 26 日に現地調査を、発掘調査終了後から平成 24 年 3 月まで整理作業を実施し報告書を作成した。
3. 現地の発掘調査から報告書刊行に至るまでの経費は、開発の原因者であるグローバルビッグファーム株式会社が全額を負担した。
4. 報告書作成業は、津田憲司（新発田市教育委員会）を中心に実施し、これを整理作業員が補助した。
5. 本書掲載の写真は、遺構を津田が、遺物を田中耕作（新発田市教育委員会）が撮影した。
6. 本書の執筆および編集は津田が行った。
7. 調査の記録および出土遺物は、新発田市教育委員会が保管している。遺物の注記は、遺跡名を「矢ヅメ」と略記し、以下「遺物番号・出土グリッド・遺構・層位・日付」を記した。
8. 本書の作成にあたり、中世の遺物については水澤幸一氏（胎内市教育委員会）にご教示を頂いた。また下記の諸氏・機関から多くのご協力・ご支援を賜った。記して感謝の意を表する。（五十音順 敬称略）
遠藤信治 小野里幹男 小林 弘 関 雅之 高橋春栄 増子正三 宮野勝英
阿賀北食肉センター事業協同組合 株式会社小野組 株式会社新潟スマセ生コン
グローバルビッグファーム株式会社 新潟県教育庁文化行政課 有限会社三英開発

凡　　例

1. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の 1/25,000 「新発田」（平成 22 年）、新発田市作成の 1/2,500 「新発田市地形図」（平成 20 年）を拡大・縮小したものである。
2. 本書に掲載した平面図の方位は、第 1・2・4 図は天を真北とし、それ以外は方位記号の方向を磁北とする。なお、磁北は真北から西偏 7° 50' である。
3. 掃図の縮尺は、遺構 1/30 ~ 1/120、遺物 1/4 を基本とし、適宜スケールと縮尺を示した。
4. 遺構実測図の「K」は擾乱を示す。
5. 土層説明での土色は、小山正忠・竹原秀雄 2008 「新版 標準土色帖」日本色研事業株式会社を使用した。
6. 遺物は、遺構単位に掲載し、掃図・図版とともに同一の番号を付した。なお、図版については、遺構名も付している。
7. 遺物観察表の数値は、() が復元値、< > が残存値を表し、計測不能なものは空欄とした。
8. 引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。

本文目次

例言・凡例	
本文目次	
挿図目次・図版目次	
第Ⅰ章 遺跡の位置と調査経過	
1　遺跡の位置と環境	1
2　調査に至る経緯と調査体制	1
3　調査の方法と経過	3
第Ⅱ章 遺構と遺物	
1　中世	5
2　古墳時代	16
3　遺構外・攢乱の出土遺物	26
第Ⅲ章　まとめ 28	
引用・参考文献	28
遺物観察表	29
報告書抄録	奥付け

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置 ······	2
第 2 図 確認調査のトレント位置 ······	2
第 3 図 確認調査の出土遺物 ······	3
第 4 図 調査区の位置と基本土層 ······	4
第 5 図 中世の遺構位置図 ······	6
第 6 図 1・2号掘立柱建物 ······	7
第 7 図 3・4号掘立柱建物 ······	8
第 8 図 5号掘立柱建物 ······	9
第 9 図 6～8号掘立柱建物と出土遺物 ···	10
第 10 図 1号井戸 ······	11
第 11 図 1号井戸の出土遺物 ······	12
第 12 図 1号水場遺構と出土遺物 ······	13
第 13 図 1～4号土坑と出土遺物 ······	14
第 14 図 1・2号溝 ······	14
第 15 図 1・2号流路と出土遺物 (1) ·····	15
第 16 図 1号流路の出土遺物 (2) ······	16
第 17 図 古墳時代の遺構位置図 ······	17
第 18 図 1号住居と出土遺物 ······	18
第 19 図 2号住居 ······	19
第 20 図 2号住居の出土遺物 ······	20
第 21 図 8・9号土坑 ······	21
第 22 図 8号溝と出土遺物 ······	21
第 23 図 3号住居と出土遺物 ······	23
第 24 図 5～7・10号土坑と出土遺物 ···	24
第 25 図 3～7号溝と出土遺物 ······	25
第 26 図 遺構外・搅乱の出土遺物 (1) ···	26
第 27 図 遺構外・搅乱の出土遺物 (2) ···	27

図 版 目 次

図版 1 3・5・6号掘立柱建物, 1号井戸, 周溝をもつ住居
図版 2 調査区(中世), 4～8号掘立柱建物, 1号井戸, 1号水場遺構, 2・4号土坑
図版 3 3号土坑, 1号溝, 1・2号流路, 調査区(古墳時代), 1・2号住居
図版 4 2・3号住居, 8・9号土坑, 8号溝
図版 5 6・7・10号土坑, 3～5・7号溝
図版 6 確認調査の出土遺物, 中世の出土遺物 (1)
図版 7 中世の出土遺物 (2), 古代の出土遺物, 古墳時代の出土遺物 (1)
図版 8 古墳時代の出土遺物 (2)
図版 9 古墳時代の出土遺物 (3)

第Ⅰ章 遺跡の位置と調査経過

1 遺跡の位置と環境

矢詰遺跡のある新発田市は、新潟県の北部、阿賀野川右岸のいわゆる阿賀北地域のほぼ中央に位置する人口約10万3千人、総面積532.82km²の地方都市である。市域に広がる平野部は、越後平野の一部をなし、東に連なる飯豊山地・二王子岳から流下する加治川や姫田川、太田川などによって形成された扇状地や自然堤防といった低地のほか、海岸線に並行な砂丘列のある海岸平野や潟湖の干拓地などによって構成されている。

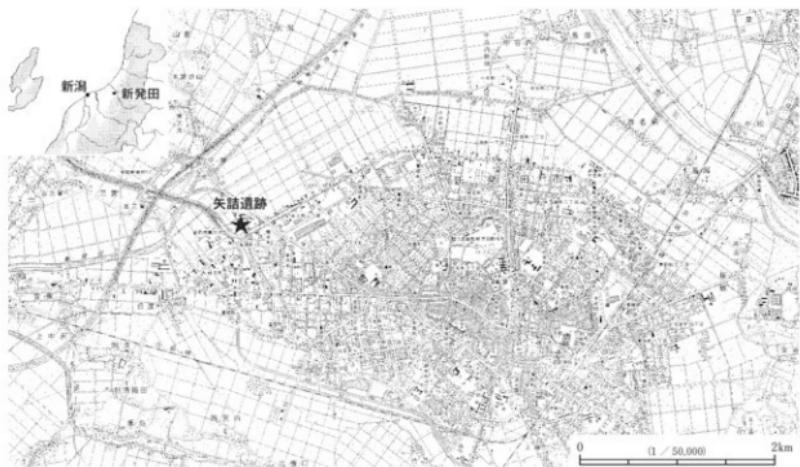
矢詰遺跡は、市街地の西部、新発田市奥山新保字矢詰406番1ほかに所在する。立地は、加治川の主流が現在よりも南、五十公野丘陵の南側を流れていた時に形成された扇状地の端部にあたる。そのすぐ北側には後背低地と海岸平野・三角洲が広がっているため、周辺は排水性が悪く、地盤は軟弱である。現在、遺跡は西半分が水田、東半分が工場跡地となっているほか、南側部分には国道7号線が通っている。また約100m離れた北東には新発田川が北流する（第2図）。標高は、西側の水田面が約4.9～5.0mなのに対し、工場跡地は約5.9mと高い。これは盛土造成によるためであり、もともとは西側の水田面と同じ位の標高であったと推定される。

2 調査に至る経緯と調査体制

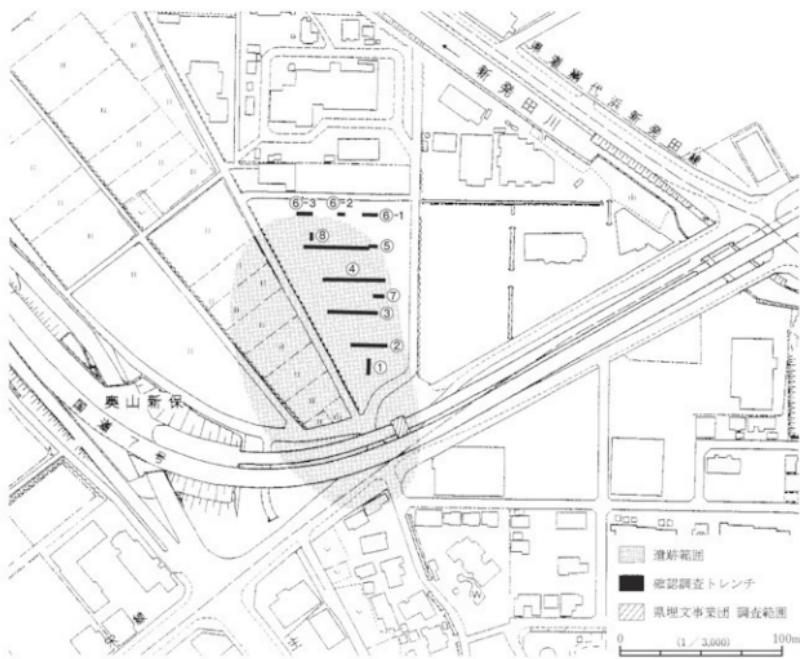
平成20年10月に、奥山新保地区において、グローバルビッグファーム株式会社（以下、事業者）による工場の移転を含む開発計画が持ち上がった。事業者は、開発予定地の買収に先立ち、有限会社三英開発を通じて、同予定地の埋蔵文化財包蔵地の有無について、新発田市教育委員会（以下、市教委）に照会を行った。同予定地には、平成17年に財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団によって発見され、一部で本発掘調査が行われた矢詰遺跡が含まれていた。そこで、事業者および土地の売却を予定していた所有者と市教委は協議を行い、遺跡の詳細な範囲と遺存状況を把握するために、平成22年度に確認調査を実施することで合意した。

確認調査は、平成22年8月10日～11日の2日間で実施した。試掘坑（トレチ）を8箇所（1～8号）設定して掘削、調査を行った。その結果、4号トレチ以南では中世と古墳時代の遺構が良好に遺存していること、同以北については、5号トレチ西端部分と8号トレチの周辺を除いて、以前に建っていた工場の基礎などにより遺構が壊されていることが明らかとなった。この結果をもとに、事業者と市教委で再度協議を行ったところ、遺構と遺物包含層が良好に残っていた南側部分については、掘削を伴う工事は行わず、駐車場用地とすることで、遺跡の保存を図ることになった。しかし、北側部分については、工場建設のため掘削は避けられず、遺跡の保存は困難であるという見通しとなった。そこで引き続き調整を行い、北側部分は、遺構が遺存していた5号トレチ西端部分と8号トレチの周辺について、平成23年5月から本発掘調査を実施することで合意した。

以上の協議を踏まえて、事業者は開発予定地を買収し、その後、平成23年4月1日付けて市教委に「矢詰遺跡の発掘調査について（依頼）」を提出した。これを受けて、事業者と新発田市长との間で、同年4月11日付けて発掘調査の実施委託契約を締結した。市教委は、同年5月9日付け文行第23号「埋蔵文化財発掘調査の報告について」を新潟県教育委員会に提出して、発掘調査に着手することを報告し、5月17日から現地調査に入った。なお、調査体制については次のとおりである。



第1図 遺跡の位置



第2図 確認調査のトレンチ位置

調査体制

平成 22 年度（確認調査）

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 大滝 異）

監 理 土田 雅徳（教育部長）

総 括 杉本 茂樹（生涯学習課長）

調査担当 田中 耕作（生涯学習課 参事）

調査員 斎澤 正史（生涯学習課 臨時職員）

事務局 渡邊美穂子（生涯学習課 主任）

本田 祐二（生涯学習課 文化財技師）

平成 23 年度（本発掘調査・整理作業）

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 塚野 純一）

監 理 塚野 純一（教育部長兼任～4月30日）

新保 勇三（教育部長 5月1日～）

総 括 杉本 茂樹（生涯学習課長～4月30日）、荻野 正彦（生涯学習課長 5月1日～）

田中 耕作（生涯学習課 参事～4月30日、生涯学習課文化行政室長 5月1日～）

調査担当 津田 憲司（生涯学習課 文化財技師～4月30日、生涯学習課文化行政室 文化財技師 5月1日～）

調査員 本田 祐二（生涯学習課 文化財技師～4月30日、生涯学習課文化行政室 文化財技師 5月1日～）

事務局 渡邊美穂子（生涯学習課 主任～4月30日、生涯学習課文化行政室 主任 5月1日～）

3 調査の方法と経過

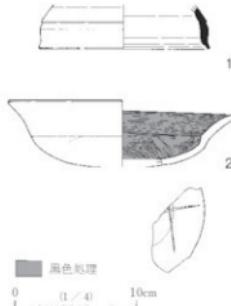
調査区およびグリッドの設定（第4図）

調査区は、確認調査で遺構および遺物包含層を検出した5号トレンチの西端部分と8号トレンチを中心とし、搅乱の影響が及んでいない範囲で設定した。調査の実施にあたり、調査区の北と東を通る道路の交点を基点に、調査区を網羅するようにグリッド設定を行った。グリッドラインは道路に平行するように設定し、一辺10mの方眼を大グリッド、さらにそれを25等分した2m方眼を小グリッドとした。呼称については、大グリッドは、西から東へ「A」・「B」…、北から南へ「a」・「b」…とし、その組み合わせで「Aa」・「Bb」…とした。小グリッドは、西から東、北から南へそれぞれ「1」・「2」…とし、大グリッドと組み合わせて「Aa1-1」・「Bb5-5」とした。

なお、確認調査の結果から、今回の調査では地表面から遺構検出面までの深さが1mを越えることが明らかであった。そこで、調査区の壁が崩落することがないよう、バックホウによる表土掘削の際に、調査区壁には傾斜をつけ、さらにその下端に幅40cm程の平坦面を設けるなどして、安全性に考慮して調査を実施した。

基本土層

遺構や搅乱の影響が及んでいないBe5-5グリッドの調査区壁際にトレンチを設定、深掘りを行い、南壁の上層を観察・記録した（①）。土層は表土を含めてI～IX層に分けられ、III層上面で中世の、V層上面で古墳時代の遺構を検出した。I層は盛土造成のための客土で、II層は水田の旧耕土である。IV層は古墳時代の遺物包含層で、炭化物粒を含むことが特徴的である。V層上面では、遺構のほかに、噴砂を検出している。噴砂は、Ce1-3～Cd3-1グリッドにかけて南東方向に延び、一部で古墳時代の遺構を壊していた。VI層以下は細砂や粗砂である。なお、調査区北側は、III・IV層に対応する層位の土質が細砂（III'・IV'層）であった。土層説明は、3号住居の埋土と合わせて記載した（第23図）。

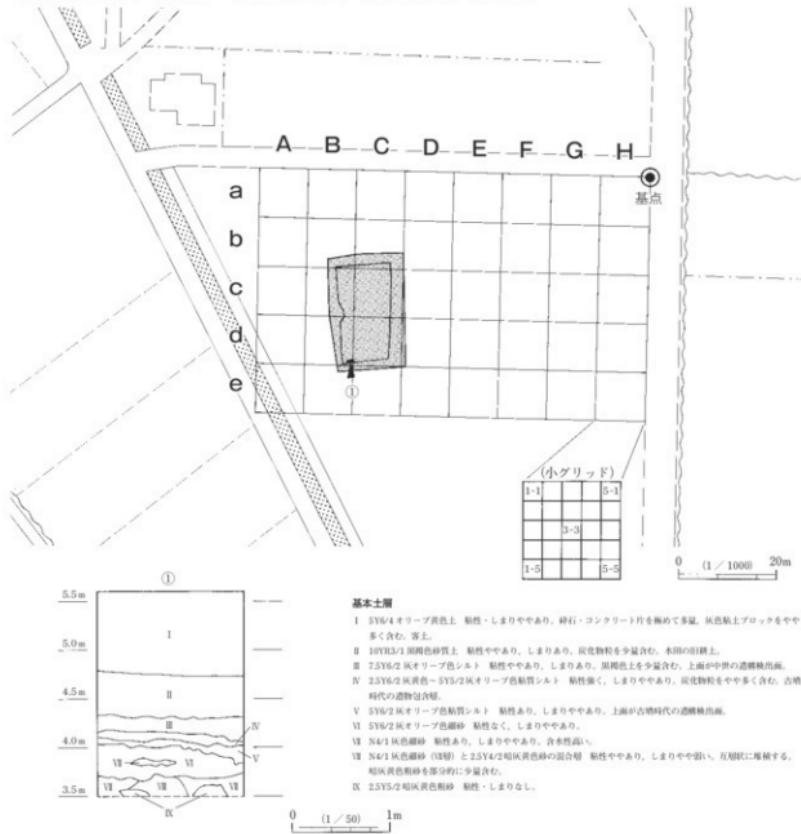


第3図 確認調査の出土遺物

現地調査と整理作業の経過

現地調査は5月17日から開始した。バックホウによる表土掘削の後、18日から人力による遺構確認を行い、中世の掘立柱建物群、井戸、水場遺構、流路などを検出した。引き続き各遺構の調査に入り、6月9日に中世の遺構調査をすべて終了した。翌10日からは、人力によるⅢ・Ⅳ層の掘り下げを行った。遺構確認の結果、古墳時代の住居、土坑、溝を検出した。20日から各遺構の調査に入り、7月21日にはすべての遺構の調査が終了し、発掘器材と現場設備の撤収を行った。25日～26日にバックホウによる調査区の埋め戻しを行い、終了後、事業者に現地を引き渡して、現場での作業を終了した。

整理作業は、発掘作業終了後の8月から作業を開始した。現場で作成した遺構実測図や写真の整理、および出土遺物の水洗・注記といった基礎的な整理作業を行った後、遺物については接合・復元作業を行った。12月からは、報告書掲載遺物の選び出しと実測、写真撮影、そして遺構と遺物図面の浄書（トレース）を行った。併せて図版版下の作成、原稿執筆・編集作業を行い、報告書を印刷・刊行した。



第4図 調査区の位置と基本土層

第Ⅱ章 遺構と遺物

今回の調査では、上層で中世の、下層で古墳時代の遺構を検出した。一部で工場の基礎工事に伴う搅乱の影響を受けてはいるが、上層・下層とも遺構の遺存状況は比較的良好であった。

以下、調査を行った中世、古墳時代の順に記述していくこととする。なお、遺構は種別ごとに両時代を通じて連続した番号を付し、個々の遺物の詳しい内容については、本文の最後に観察表としてまとめて記載した。

1 中世

中世の遺構はⅢ層の上面で確認した。掘立柱建物については、現場調査中に柱穴の配列関係を確認することが難しく、いずれも整理段階で検討したものである。結果的に8棟を抽出した。そのほかに、井戸1基、水場遺構1基、土坑4基、溝2条、流路2本、小ビット36基を検出した。これら遺構の多くは、調査区の北半分、Be4-5～Cc4-5グリッドより北側に位置する(第5図)。出土遺物については、須恵器系陶器の珠洲焼が主体を占める。出土量は少ないが、半分が遺構からの出土であった。

ここでは、小ビットを除いた遺構について記述をしていく。なお、Bd4-1～Cd2-5グリッドにおいて流路を1本検出したが、出土遺物から近・現代の所産と推定されるため、搅乱として扱っている。

1号掘立柱建物(第6図)

Be4-1～5-3グリッドに位置する。1号流路によって一部壊されているため、規模は不明であるが、柱間数は1間以上×2間で、南北方向に棟が長い側柱建物と推定される。ただし、柱間寸法が、P2とP3は195cmなのに対して、P1とP2は111cmと短く、片面庇付側柱建物の可能性もある。P4は、2号掘立建物のP4と重複するが、新旧関係は判然としない。確認できた規模は、桁行2.22m、梁行3.06mで、主軸はN-27°-Eである。柱穴の深さは、P1・2が検出面から54cmなのに対して、P3・4は21～33cmと浅い。なお、P2は掘り形が確認できず、出土した柱も下端部の両側を斜めに削り込んでいることから、打ち込みによる柱と考えられる。遺物は、P1から古墳時代の土師器甕の小片が出土しているが、混入であり、図化していない。

2号掘立柱建物(第6図)

Bb5-5～Cc1-3グリッドに位置する。建物は、北側と東側の調査区外へ延びると考えられるので、規模は不明であるが、柱間数は1間以上×2間以上で、北東方向に棟が長い側柱建物と推定される。1号流路によって一部壊されているほか、1・5号掘立柱建物と一部重複する。ただし、新旧関係は不明である。確認できた規模は、桁行2.13m、梁行4.74mで、主軸はE-34°-Nである。柱間寸法は、梁行が234～240cmで、桁行の213cmよりも若干長い。柱穴の深さは、検出面から30～36cmでおおむね同じといえる。

P1・3・4からは柱を検出した。いずれも柱根部である。断面は円形、下端部は平坦で、柱穴底面から6～10cm程沈み込んでいた。そのほかに遺物は出土していない。

3号掘立柱建物(第7図)

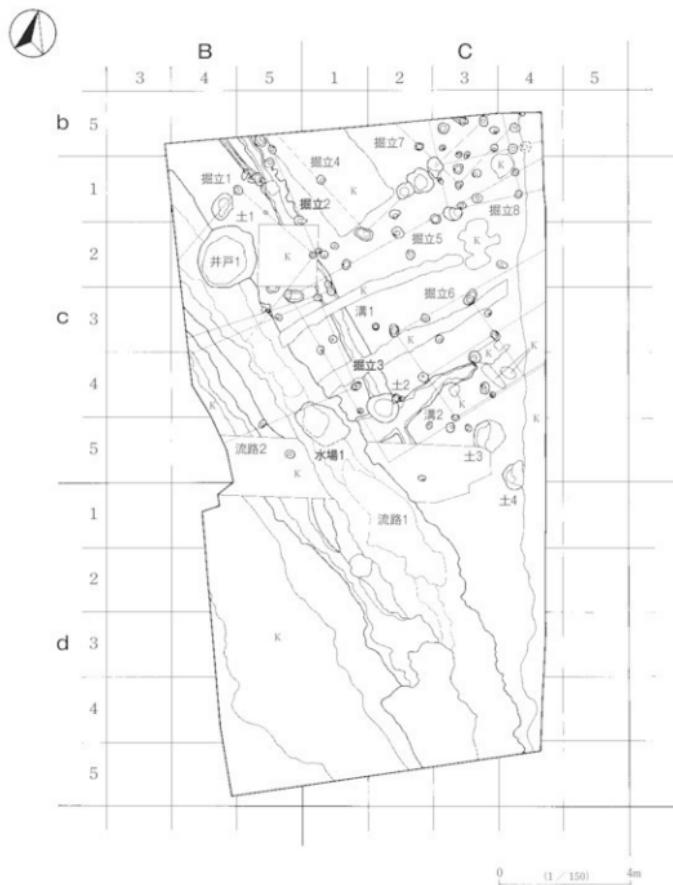
Be5-3～Cc1-4グリッドに位置し、1・2号流路に一部壊されている。建物は、東側の調査区外へ延びると考えられるため、規模は不明であるが、柱間数は2間以上×2間で、北東方向に棟が長い側柱建物と推定される。5号掘立柱建物と一部で重複するが、新旧関係は不明である。確認できた規模は、桁行3.1m、梁行3.0mで、主軸はN-52°-Eである。柱間寸法は、桁行が138cm、梁行は135～165cmである。柱穴の底面は、検出

面からの深さが15～27cmとややばらつく。柱穴から遺物は出土していない。

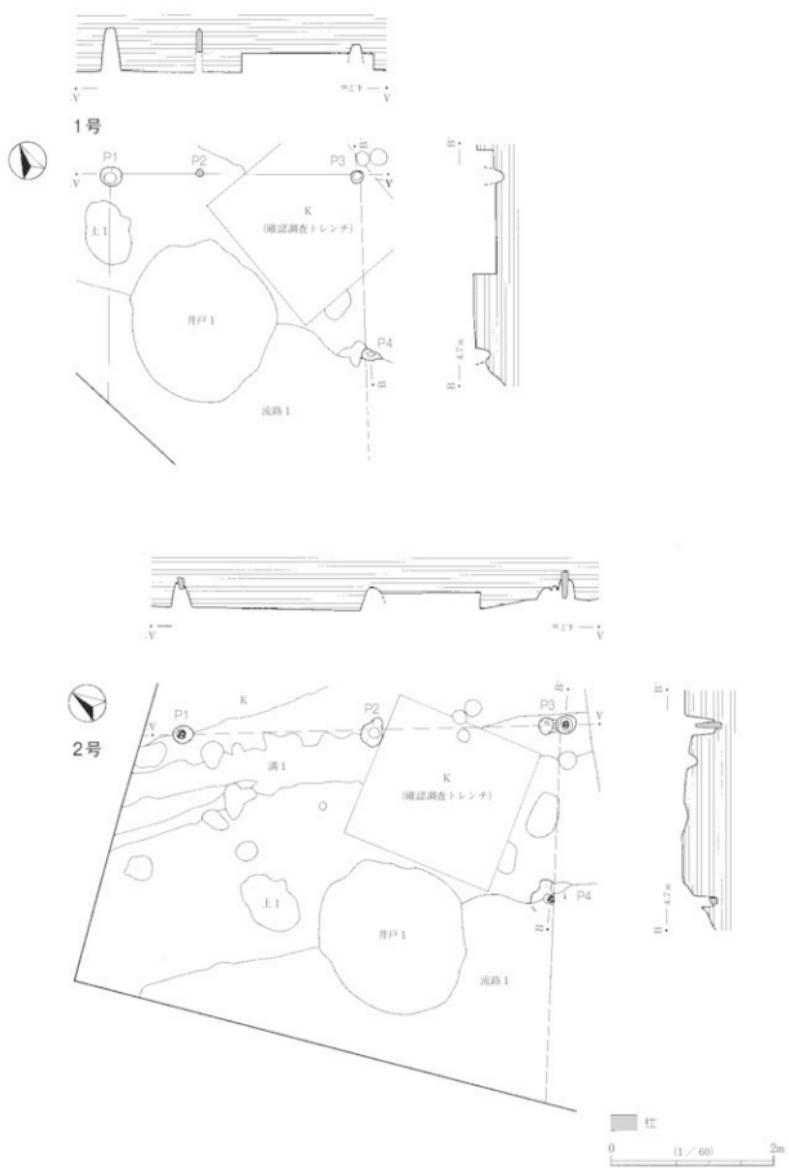
4号掘立柱建物（第7図）

Bb5-5～Cb3-5 グリッドに位置する。建物は、北側の調査区外へ延びると考えられるので、規模は不明であるが、柱間数は2間以上×1間以上で、北東方向に棟が長い側柱建物と推定される。7・8号掘立柱建物と一部重複するが、新旧関係は不明である。確認できた規模は、桁行5.0m、梁行2.16mで、主軸はN-33°-Eである。柱間寸法は、桁行216～285cm、梁行216cmである。柱穴の深さは、検出面から18～42cmとばらつく。なお、P3はP2を埋めた後に掘り込まれており、本建物に伴わない可能性も考えられる。

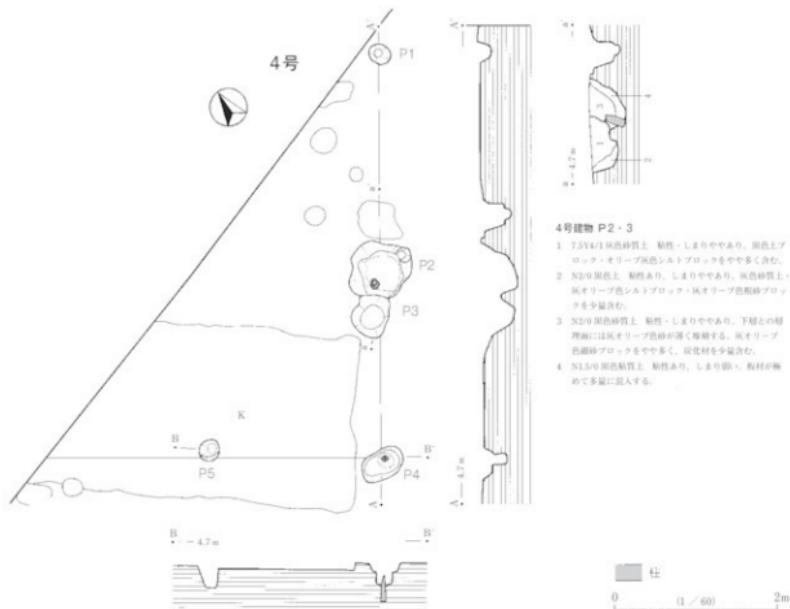
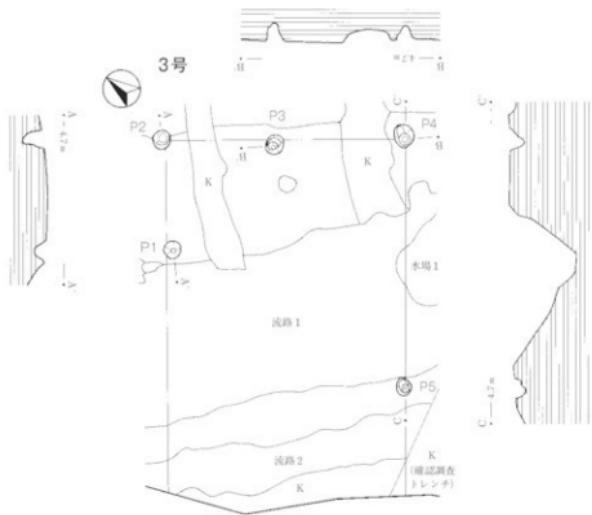
P2・4からは柱を検出した。どちらも柱根部で、断面は円形、下端部は平坦である。P4の柱は、柱穴底面から21cm程沈み込んでいた。そのほかには、P2から板材の小片が出土しただけである。



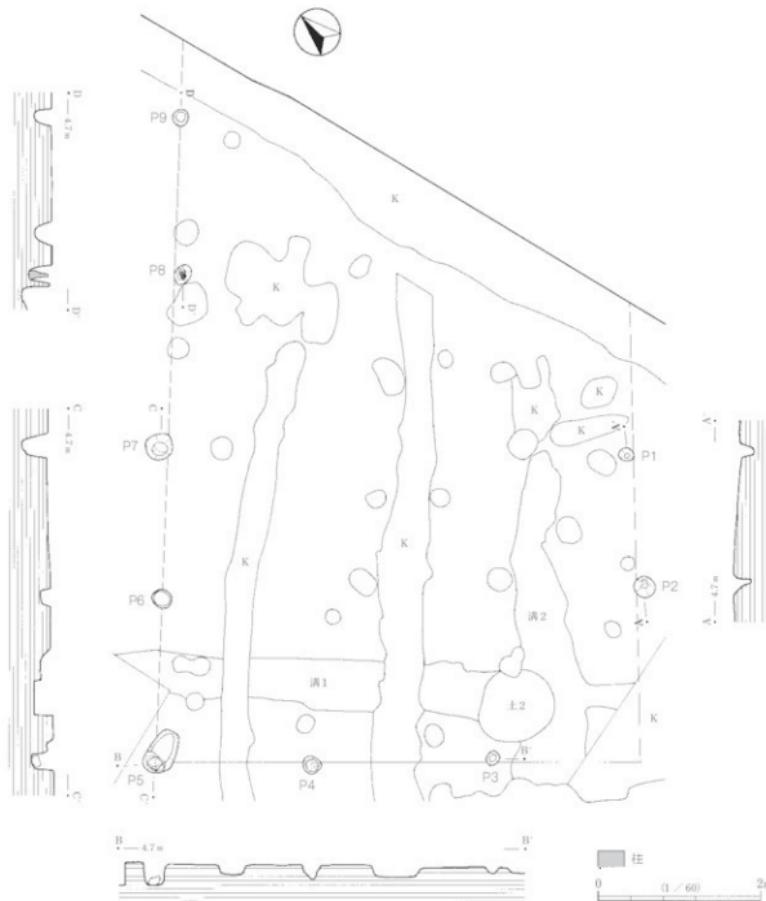
第5図 中世の遺構位置図



第6図 1・2号掘立柱建物



第7図 3・4号掘立柱建物

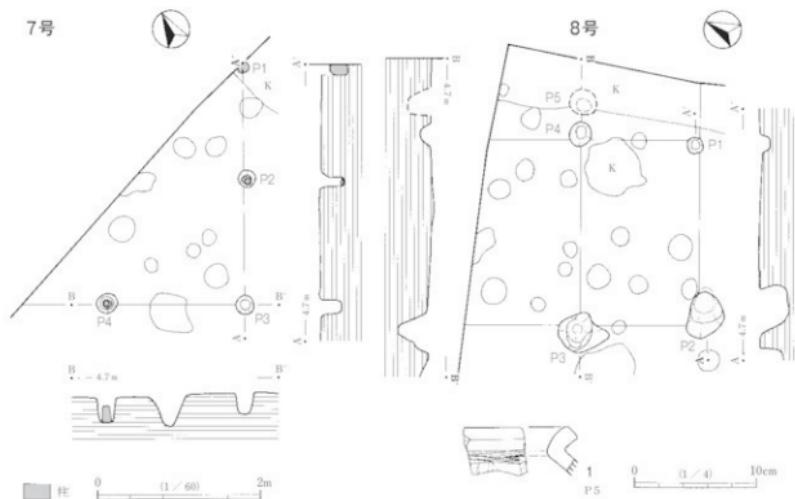
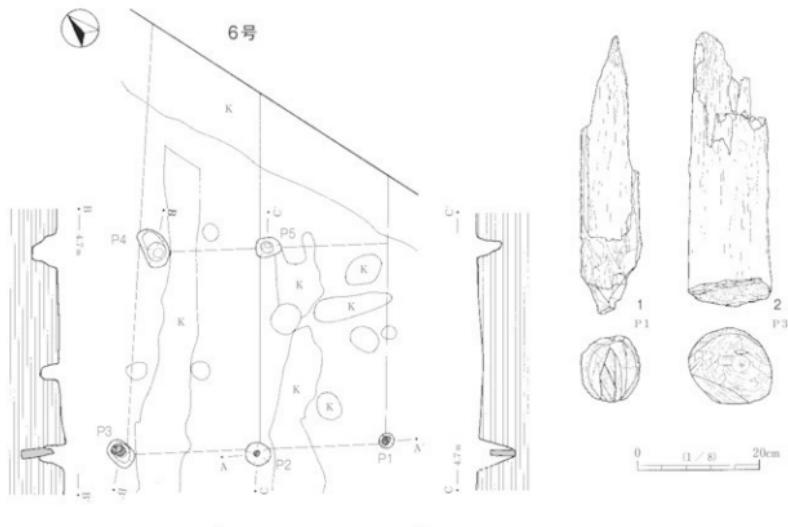


第8図 5号掘立柱建物

5号掘立柱建物 (第8図)

Be5-3～Ce4-4に位置する。建物は、東側の調査区外へ延びると考えられるので、規模は不明であるが、柱間数は4間以上×3間で、北東方向に棟の長い側柱建物と推定される。2・3・6・8号掘立柱建物と一部重複するが、いずれも新旧関係は不明である。確認できた規模は、桁行7.95m、梁行6.0mで、主軸はN-43°-Eである。柱間寸法は、北側の桁行が186～213cmなのにに対し、南側のそれは153cmと短い。梁行は195～219cmである。柱穴の深さは、P3とP6が検出面から10cm前後と浅く、それ以外は18～30cmである。なお、南西隅の柱穴は、確認調査時に削平してしまったためか、検出できなかった。

P5からは礎盤石を検出した。材質は花崗岩で、上面は平坦に加工している。また、P8からは柱の柱根部が出土している。断面は円形で、下端部は平坦である。そのほかの柱穴から遺物は出土していない。



第9図 6～8号掘立柱建物と出土遺物

6号掘立柱建物（第9図）

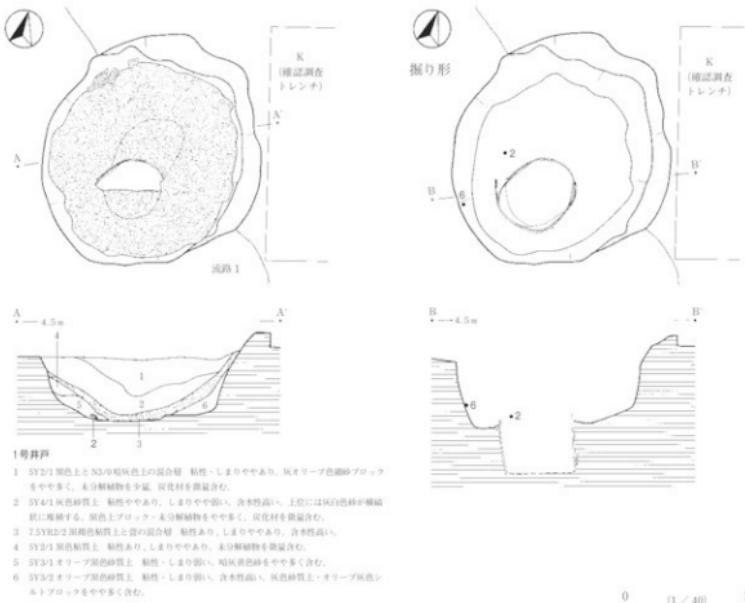
Ce2-3～4-4グリッドに位置する。建物は、東側の調査区外へ延びると考えられるので、規模は不明であるが、柱間数は2間以上×2間で、北東方向に棟の長い総柱建物と推定される。5号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は不明である。確認できた規模は、桁行2.46m、梁行3.30mで、主軸はN-42°-Eである。柱間寸法は、桁行が246～255cmである。梁行は162～171cmだが、P4とP5の間は138cmと短い。柱穴の深さは、検出面から24～45cmで、P3の柱は底面からさらに24cm程沈み込む。なお、P1は掘り形のない打ち込みの柱である。

P1・2・3からは柱を検出した。いずれも柱根部で、断面は円形である。下端部は、P2・3の柱は平坦だが、P1のそれは両側から斜めに削り込まれており、打ち込みに適した加工が施されている。そのほかに、P2から古墳時代土師器の小片が出土しているが、混入であり、図化していない。

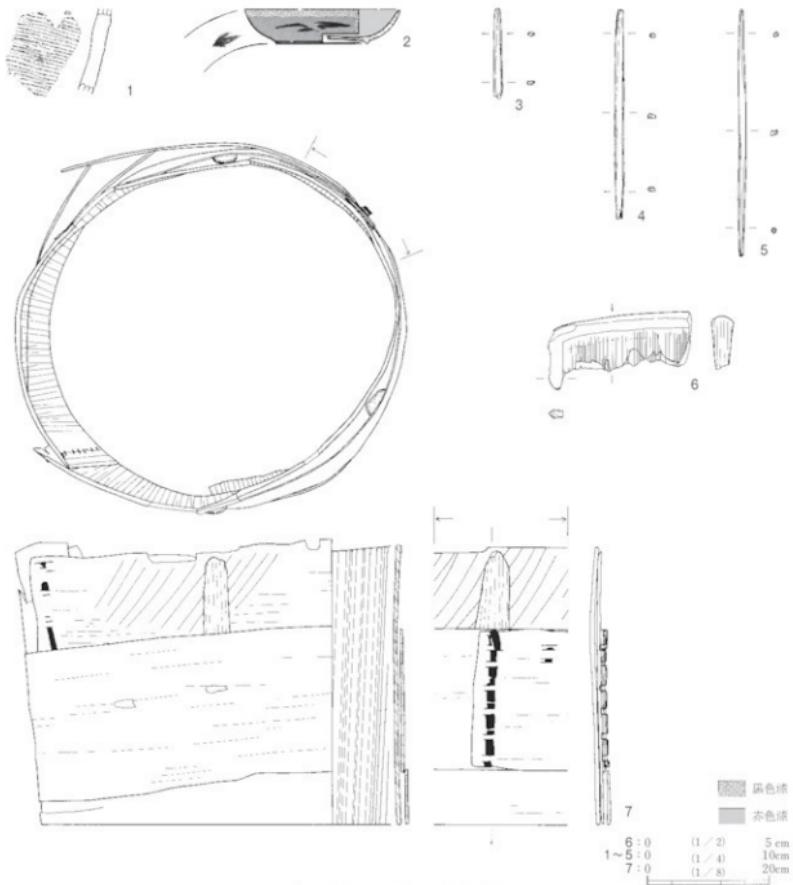
7号掘立柱建物（第9図）

Cb2-5～Cc3-1グリッドに位置する。建物は、北側の調査区外へ延びると考えられるので、規模は不明であるが、柱間数は2間以上×1間以上で、北東方向に棟の長い側柱建物と推定される。4・8号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は不明である。確認できた規模は、桁行2.91m、梁行1.71mで、主軸はN-29°-Eである。柱間寸法は、桁行が141～150cmなのに対し、梁行は171cmとやや長い。柱穴の深さは、検出面から27～33cmとおむね同じである。なお、P1は、搅乱の影響を受けていることもあって、柱穴の掘り形を確認できていない。

P1・2・4からは柱を検出した。断面は、P1が四角形、P2・4は円形で、下端部はいずれも平坦である。そのほかに、P2・4から古墳時代土師器の小片が出土しているが、混入であり、図化していない。



第10図 1号井戸



第11図 1号井戸の出土遺物

8号掘立柱建物（第9図）

Cb4-5～Ce4-1 グリッドに位置する。建物は、北側と東側の調査区外へ延びると考えられるので、規模は不明であるが、柱間数は2間以上×2間以上で、東西方向に棟が長い総柱建物と推定される。4・7号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は不明である。確認できた規模は、桁行2.76m、梁行1.59mで、主軸はN-64°-Eである。柱間寸法は、桁行が180～195cmなのにに対し、梁行は141～159cmとやや短い。柱の深さは、P 2・3・5が検出面から30～36cmなのに対し、P 1・4は12～15cmと浅い。なおP 5は、下層の調査で3号住居の土層断面を観察した際に検出したため、平面プランは推定である。その埋土は、黒色粘質土とオリーブ灰色細砂～砂の混合層である。遺物は、P 5から珠洲焼壺の口縁部破片が出土した。時期は、出土遺物から14世紀前半と推定される。

1号井戸（第10・11図）

Bc4-2～5-2グリッドに位置する。1号流路が埋まっている後に掘り込まれている。掘り形は、平面が円形、断面は箱形で、規模は径が $190 \times 180\text{cm}$ 、検出面からの深さは72cmである。掘り形の壁面は、黒色粘質土とオリーブ黒色砂質土（4～6層）で裏込めをした後、黒色粘質土にイネ科の植物（萱）を混ぜ込んだ土（3層）を、底部から壁面にかけて貼り付けている。底面の最下部には、曲物を転用した水溜施設を設置している。なお、検出時は、貼り付け土の一部が崩れて水溜に落ち込んでいた。遺物はいずれも、裏込めの5・6層と貼り付け土の3層からの出土であり、理土である1・2層からは出土していない。時期は、出土遺物から15世紀前半と推定される。

1号水場遺構（第12図）

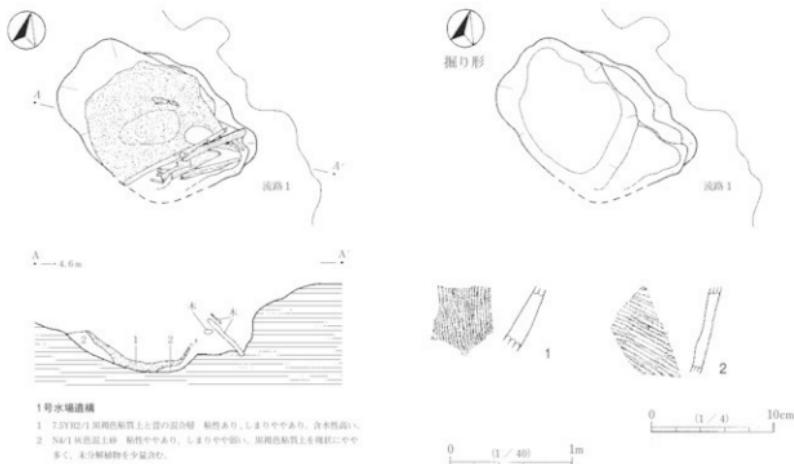
Ce1-4～1-5グリッドに位置する。1号流路内での検出である。掘り形は、平面がやや不整な梢円形、断面は緩やかな弧状である。規模は、長軸が170cm、短軸が108cmで、流路底面からの深さは36cmである。構造は、掘り形の壁面に灰色混土砂（2層）で裏込めを行った後、上流にあたる東側に、横木と杭および曲物の底板などを含む板材で堰を作る。その後、1号井戸と同様、黒色粘質土に萱を混ぜ込んだ土（1層）を壁面に貼り付けている。出土遺物は、珠洲の壺・甕の破片がそれぞれ1点だけであり、本遺構の具体的な用途を示唆するようなものは出土していない。時期は、出土遺物から14世紀代と推定される。

1～4号土坑（第13図）

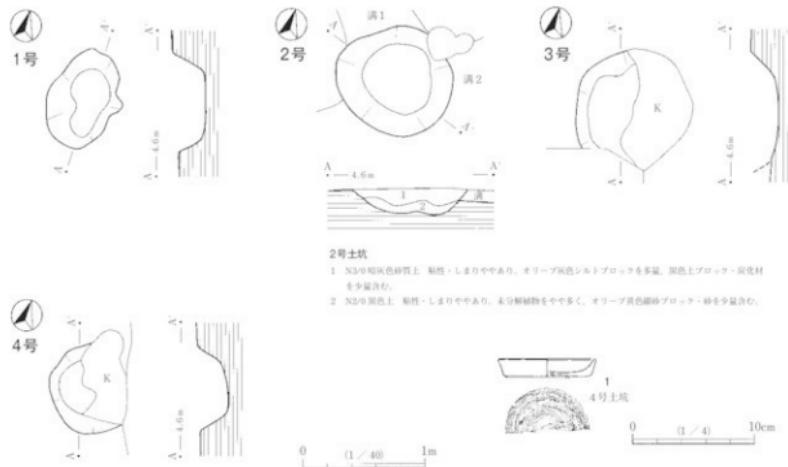
1号土坑は、Be4-1グリッドに位置する。平面は梢円形、断面は逆台形で、規模は長軸82cm、短軸54cm、検出面からの深さは39cmである。遺物は、土師器の小破片が僅かに出土しているが、混入であり、図化していない。

2号土坑は、Ce2-4・5グリッドに位置する。1・2号溝を壙して掘り込んでいる。平面は円形、断面は逆台形で、規模は径が $96 \times 88\text{cm}$ 、確認面からの深さは20cmである。理土は2層に分けられる。出土遺物はない。

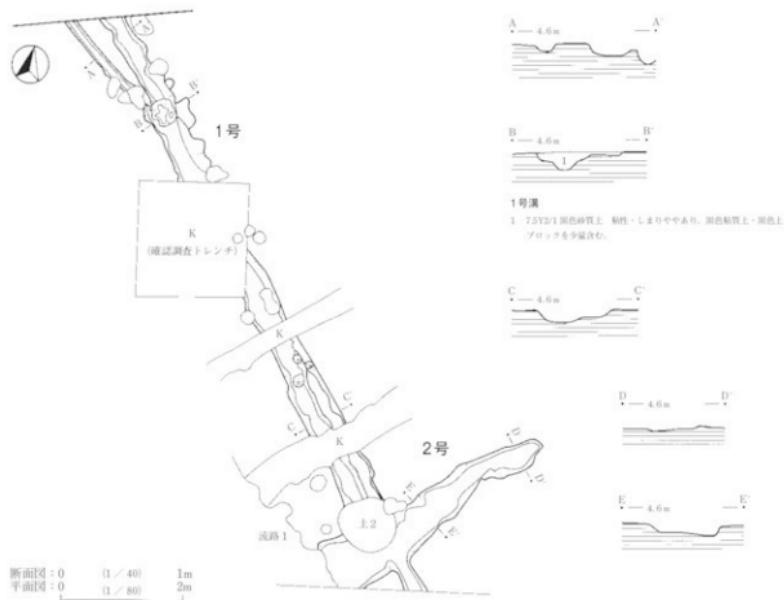
3号土坑はCe3-5・4-5グリッドに、4号土坑はCe4-5・Cd4-1グリッドに位置する。どちらも搅乱によって半分程壊されているが、平面は円形と推定される。断面は逆台形で、確認面からの深さはそれぞれ34cmと24cmである。遺物は、4号土坑から、かわらけが1点出土している。14世紀の所産と推定される。



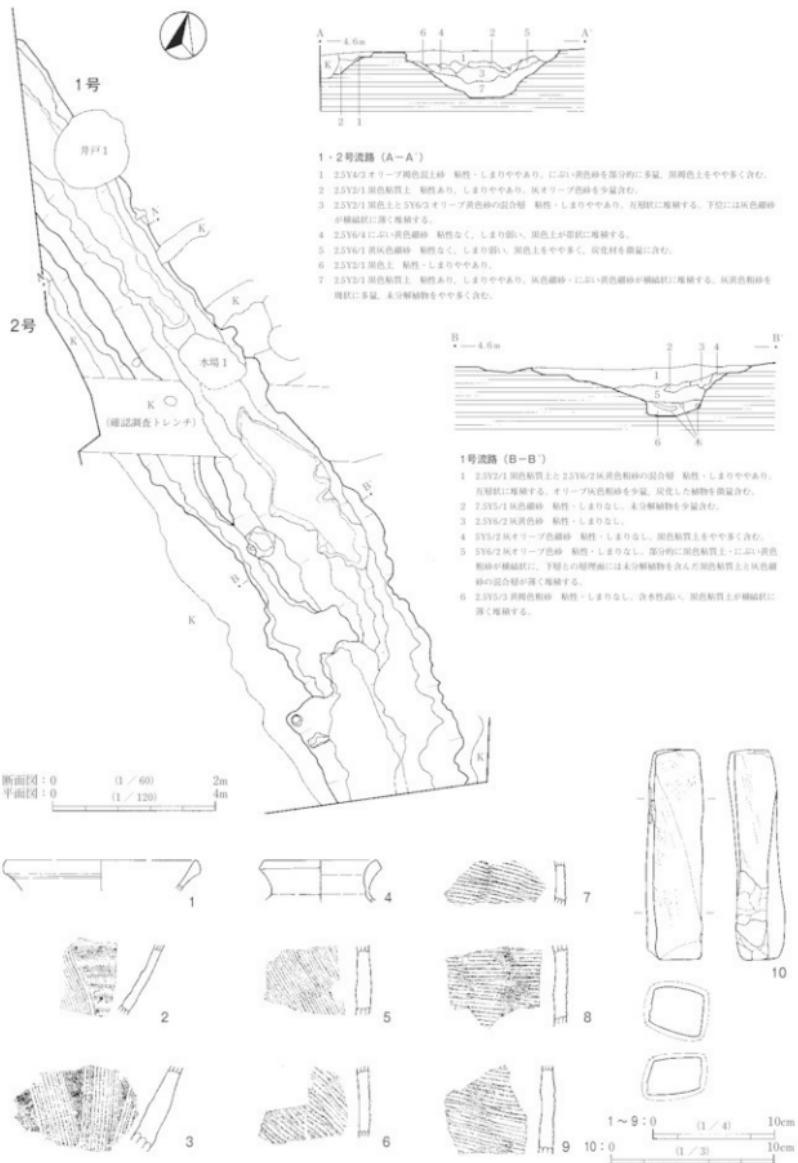
第12図 1号水場遺構と出土遺物



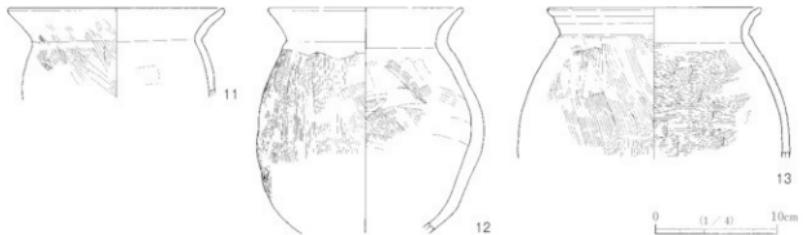
第13図 1～4号土坑と出土遺物



第14図 1・2号溝



第15図 1・2号路と出土遺物（1）



第16図 1号流路の出土遺物（2）

1・2号溝（第14図）

1号溝は、Bb4-5～Cc2-4 グリッドに位置する。2号土坑と搅乱に一部壊されているほか、1～3・5号掘立柱建物と部分的に重複するが、その新旧関係は不明である。幅は 14～32cm で、断面は逆台形である。底面はやや凹があり、検出面からの深さは 8～14cm である。北西方向へ直線状に延び、Be5-1 グリッドで 2 条に分かれる。埋土は黒色砂質土の單一層である。土師器の小片がわずかに出土しているが、混入であり、図化していない。

2号溝は、Cc1-5～3-4 グリッドに位置する。2号土坑と 1号流路、搅乱に一部壊され、5・6号掘立柱建物と一部重複する。幅は 22～46cm で、断面は逆台形である。底面は平坦で、検出面からの深さは 4～10cm と浅い。北東方向へ直線状に延び、Cc2-4 グリッドで 1号溝と直交する。ただし新旧関係は不明で、出土遺物はない。

1・2号流路（第15・16図）

1号流路は、Be4-1～Cd4-5 グリッドに位置する。直線状に、南東から北西に向かって流下していたと考えられる。幅は 1.9～3.8 m で、検出面から底面までの深さは 60cm 前後である。

2号流路は、Cd1-1 グリッドで 1号流路から分流する。1号流路と同様、直線状に北西方向へ流下していたと考えられる。幅は 0.5～1.1 m、検出面からの深さは 7～27cm で、下流にいくに従って深くなる。

遺物は、いずれも 1号流路から出土している。中世に該当するものとしては、珠洲焼の片口鉢や壺、甕のほか、白磁碗の破片が出土した。なお、底面がIV層以下の上層まで達しているため、古墳時代の土師器も出土している。出土遺物から、1号流路の時期は 14世紀代と推定され、その分流である 2号流路も同時期と考えられる。

2 古墳時代

古墳時代の遺構は V 層の上面で確認した。検出した遺構は、竪穴住居 3軒、土坑 6基、溝 6条、小ピット 8基で、いずれも古墳時代後期に該当する。以下、小ピットを除いた遺構について、種別ごとに記述していく。ただし、8・9号土坑と 8号溝については、2号住居に伴う周溝と判断したため、同住居に統けて記述している。

なお、Cb1-5～2-5 から Ce4-1～4-3 グリッドにかけて、砂を検出した。幅は 3.5～4.0 m と広く、南北方向へ帯状に延びる。色調はにぶい黄色で、しまりは非常に強い。流路の可能性も考慮したが、トレンチを掘削して土層断面を観察した結果、地山と判断した。

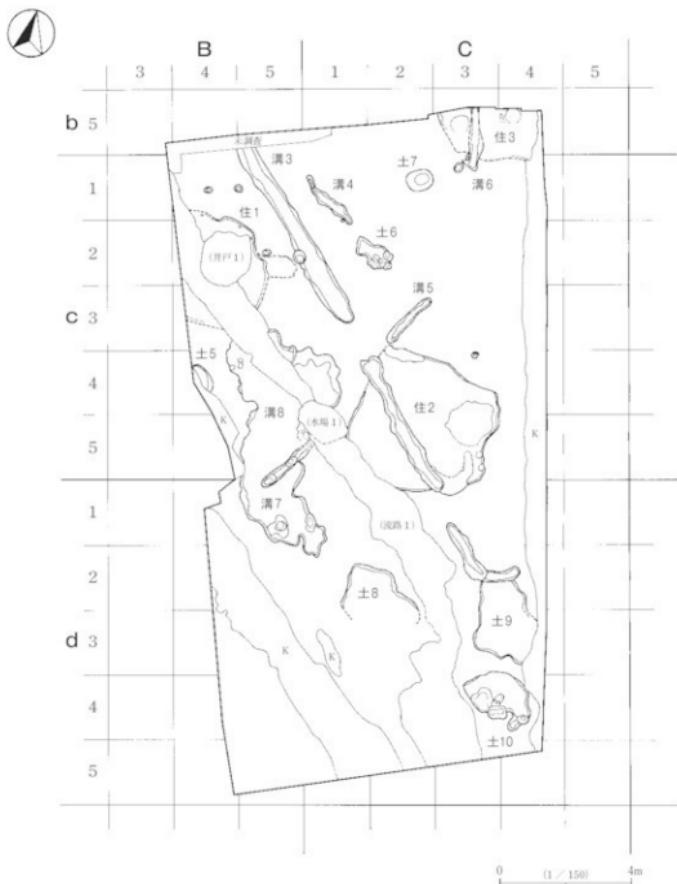
1号住居（第18図）

Be4-1～5-3 グリッドに位置する。埋土と地山の識別が難しく、一部でプランを検出できなかった部分がある。1号井戸と 1号流路によって大半を壊されており、遺存状態は良くない。西側の調査区外にさらに延びるため、規模は不明であるが、平面は方形もしくは長方形と考えられる。確認できた規模は、3.42×2.46 m で、検出面から床面までの深さは 7 cm である。なお、Be4-3 グリッドの調査区東壁でも壁の立ち上がりを確認したが、

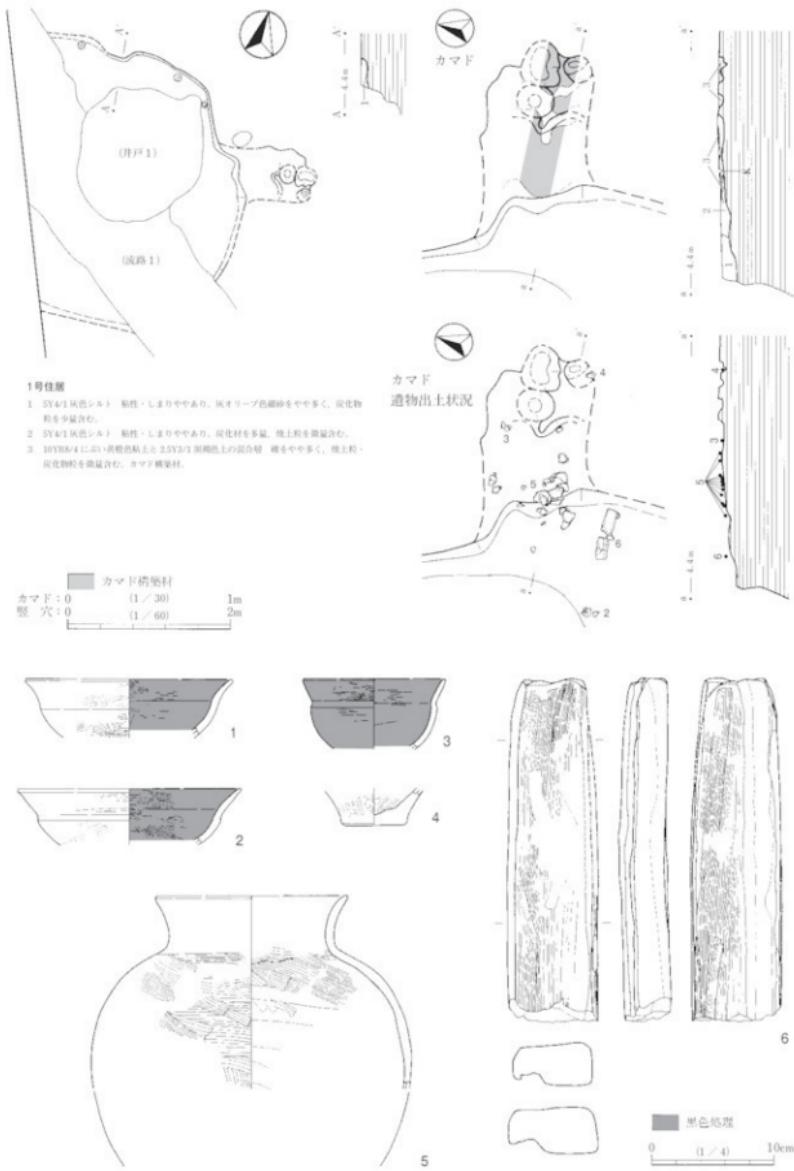
掘り込みの深さはほぼ同じであった。もともと地山への掘り込みが浅いと考えられる。主柱穴は確認できていないが、北側の壁に沿って、径9cm、床面からの深さが4~8cmの小ビットを3基検出した。壁柱穴と考えられる。

カマドは、袖部は残っていないが、袖の芯材などの遺物出土状況から、東壁のほぼ中央に付設されたと推定される。煙道部は、平面でプランを把握することが難しかったため、トレンチを掘削して確認を行った。そのため、部分的な検出となっている。煙道部は住居の外に延び、長さは96cmである。掘り込みはとても浅く、先端部には小ビット状の掘り込みがある。上層には、カマドの構築材が非常に薄く、やや疊らに堆積していた。貯蔵穴などの施設は見つかっていない。

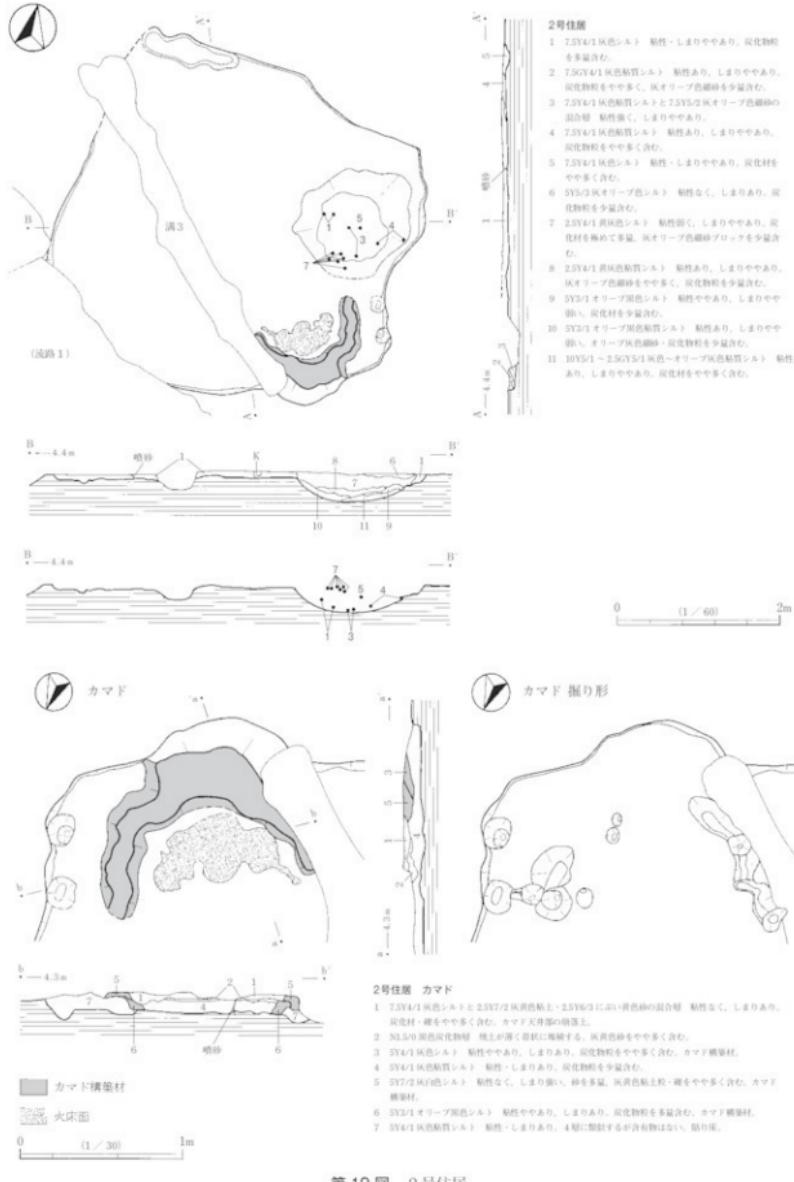
遺物は、土師器の壺・小型鉢・甕のほかに、カマドの袖部芯材と推定される板状土製品(6)が出土している。いずれもカマドとその周辺からの出土であった。



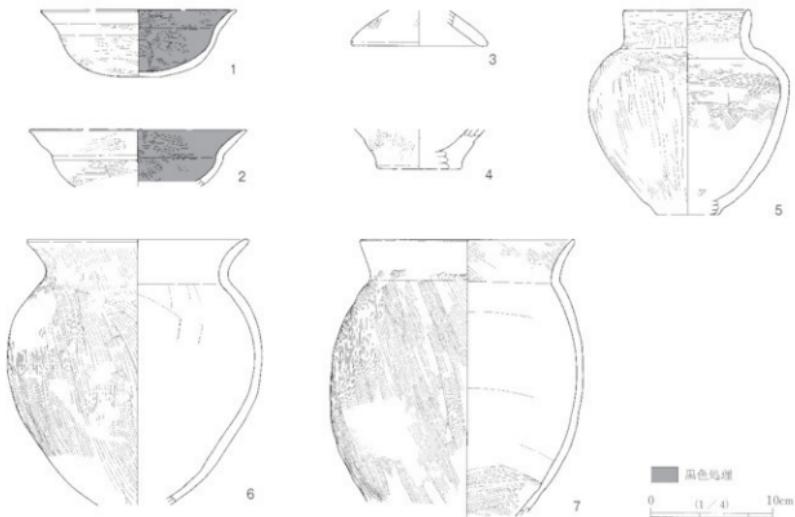
第17図 古墳時代の遺構位置図



第18図 1号住居と出土遺物



第19図 2号住居



第20図 2号住居の出土遺物

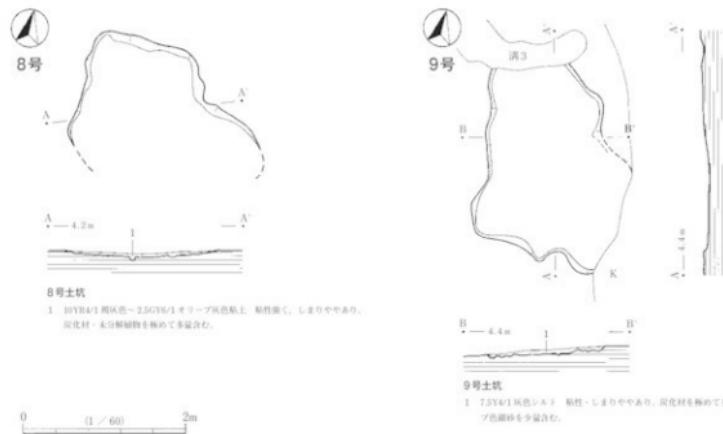
2号住居 (第19・20図)

Ce1~Cd3-1 グリッドに位置する。3号溝と1号流路によって一部壊されているが、遺存状況は他の住居と比べた場合、比較的良好といえる。平面は不整な方形で、規模は 4.35×4.14 m である。床面とカマド、貯蔵穴を検出したが、主柱穴および壁の立ち上がりは確認できなかった。当初は、検出面からの掘り込みを壁と捉えていたが、住居やカマドの土層断面を観察した結果、それは壁ではなく住居の掘り形であり、1~5層は貼り床であると判断した。掘り形の深さは 6~9 cm である。北西隅に溝状の、南東隅に小ビット状の掘削痕が認められた以外は、比較的平坦であった。

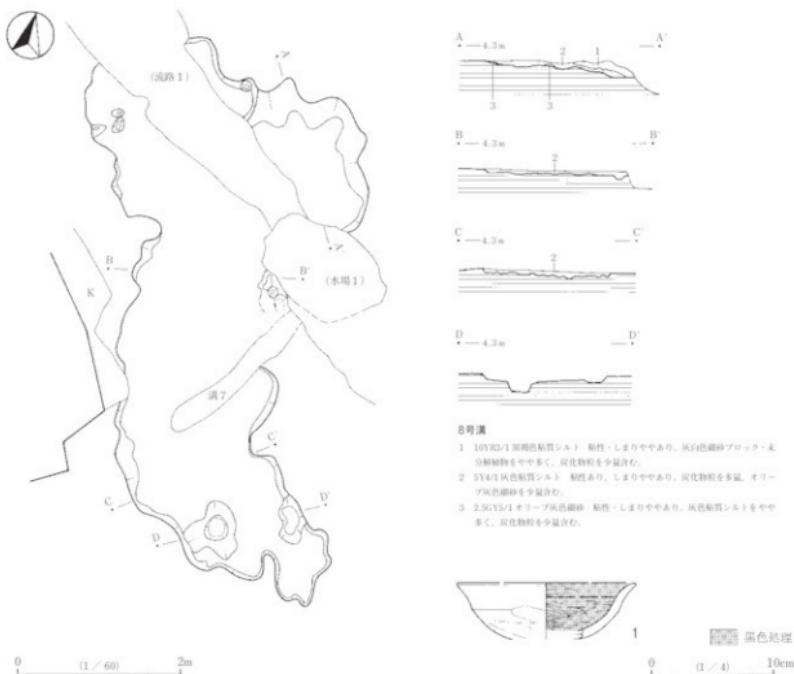
カマドは、南東隅に北向きで付設されている。上部は大幅に削平されていたが、袖部や火床面を検出すことができた。ただし、煙道部は確認できていない。両袖の内側は、幅が 107 cm、奥行きが 56 cm である。火床面は、掘り込みがなく、平坦である。土層断面の観察から、カマドの構築手順は次のように考えられる。最初に、住居の貼り床を掘削してから袖部を作る。その後、袖部の内側に土を盛って床面を作つてから、奥壁部と天井部を構築する、というものである。通常、カマドの奥壁は住居の壁面を利用していることが多い。しかし、本住居は、1号住居と同様、壁の高さが非常に低かったと推測されるので、あえて奥壁部を構築する必要があったと考えられる。カマドの掘り形は平坦であるが、袖の部分については、溝状および小ビット状の掘削痕が認められた。この掘削痕は、袖部を意識した意図的な掘り込みである可能性もあるが、判然としない。

貯蔵穴は、東壁際のほぼ中央に設けられている。貼り床を行つた後に掘削している。平面は不整な梢円形で、断面は弧状である。規模は、長軸が 147 cm で、短軸が 130 cm 以上である。床面からの深さは 33 cm で、埋土は 6 層に分けられる。

遺物の出土量が多い。いずれも土師器で、貯蔵穴のほか、カマドの周辺や床面上から出土している。種別は壺と甕が主体であり、そのほかに高杯や壺も少量出土している。ただし、破片資料が多く、復元できたものは少ない。ここでは 7 点を図化した。



第21図 8・9号土坑



第22図 8号溝と出土遺物

2号住居の周囲、南から西にかけて、8・9号土坑と8号溝を検出した。これらの遺構は、位置関係が住居を巡るような配置であることから、住居に伴う周溝と考えられる。以下、各遺構について記述する。

8号土坑（第17・21図）

2号住居の周溝の一部で、Cd1-2～2-2グリッドに位置する。調査時のトレンチ掘削により、プランの一部を検出できていないが、平面は不整形と推定される。底面は、一部に凹凸はあるが比較的平坦で、断面は非常に緩やかな弧状である。確認できた規模は、長軸が237cm、短軸が132cmで、検出面からの深さは3～9cmと非常に浅い。埋土は、褐色～オリーブ灰色粘土の単一層である。遺物は、土師器の壺と甕が出土しているが、いずれも小片であり、図化していない。

9号土坑（第17・21図）

2号住居の周溝の一部で、Cd3-2～4-3グリッドに位置する。北側を3号溝に、東側の一部を搅乱によって壊されているため、規模は不明であるが、平面は南北に長い不整形と推定される。底面は比較的平坦で、断面は逆台形である。確認できた規模は、長軸が258cm、短軸が144cmで、検出面からの深さは3～6cmと非常に浅い。埋土は、灰色シルトの単一層である。遺物は、土師器の甕がわずかに出土しているが、小片のため図化していない。

8号溝（第17・22図）

2号住居の周溝の一部で、Be4-3～Cd1-2グリッドに位置する。1号水場遺構と1号流路、7号溝によって一部壊されている。平面はやや不整形で、南北に長く、南側で東に若干屈曲する。底面は、一部で小ピット状の掘り込みや凹凸があるが、比較的平坦である。断面は逆台形で、長さが7.02m、幅が1.53～3.15mである。検出面から底面までは、一部で20cmとやや深いが、全体的には3～9cmと非常に浅い。埋土は粘質シルトと細砂で、3層に分けられる。遺物は、土師器の壺と甕が出土している。そのほとんどが2層から出土した。小片が多く、図化できたのは壺1点だけである。

3号住居（第23図）

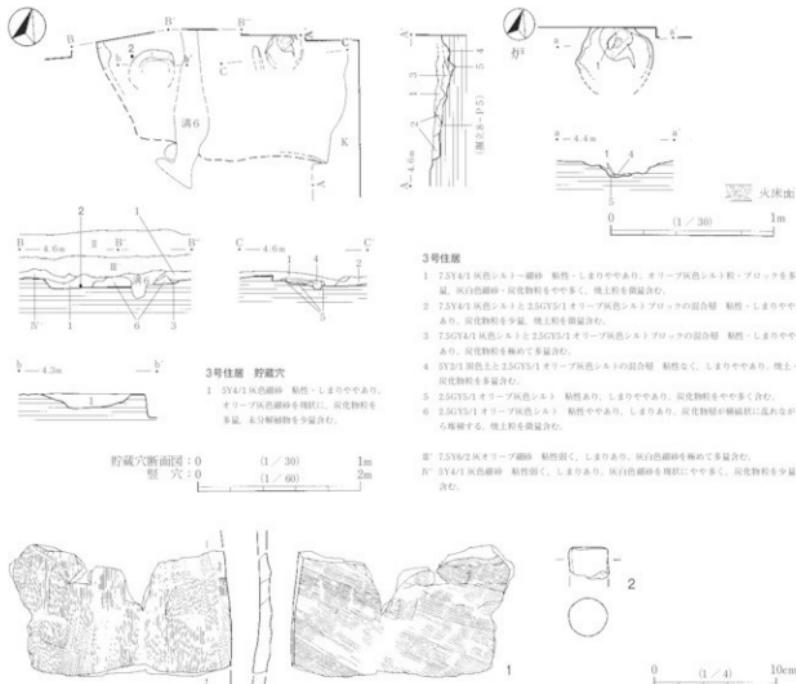
Cb3-5～Cc4-1グリッドに位置する。埋土と地山の識別が難しく、トレンチ掘削による土層断面の観察によつて確認を行った。そのため、プランは部分的な検出となっている。6号溝と搅乱を一部壊されている。北側と東側の調査区外にさらに延びるため、規模は不明であるが、平面は方形もしくは長方形と推定される。確認できた規模は、3.06×1.5mで、検出面から床面までの深さは6～12cmである。ガ¹と貯蔵穴を検出したが、主柱穴は確認できなかった。貼り床は行っていない。

ガ¹は、床面を掘り込んでいる。北側の調査区外に延びており、また調査時のトレンチ掘削により一部を壊していることから、規模は不明であるが、平面は円形と推定される。断面は逆台形で、床面から二段に掘り込む。掘り込みの底面から壁にかけては、オリーブ灰色シルト（5層）を充填し、板状土製品を設置していた。確認できた規模は、径が48cmで、床面からの深さは10cmである。

ガ¹のすぐ西脇では、溝の先端部を検出した。幅は10cmで、床面からの深さは6cmとやや浅い。土層断面の観察から、ガ¹を作った後に掘削したと考えられる。ガ¹に伴う間仕切り溝と推測される。

貯蔵穴は、正確な規模は不明だが、平面は円形で断面は弧状と推定される。確認できた規模は、径が54cm、床面からの深さは10cmで、埋土は灰色細砂の単一層である。

遺物は、土師器の壺と甕のほかに、板状土製品と土製支脚が出土している。ガ¹の部材である板状土製品（1）は、縦・横の断面とともにやや内湾し、側面を研磨している。内面には、粘土組の輪積み痕が認められる。壺と甕は、1～3・6層から出土しているが、いずれも小片のため図化していない。また、貯蔵穴から遺物は出土しなかった。



第23図 3号住居と出土遺物

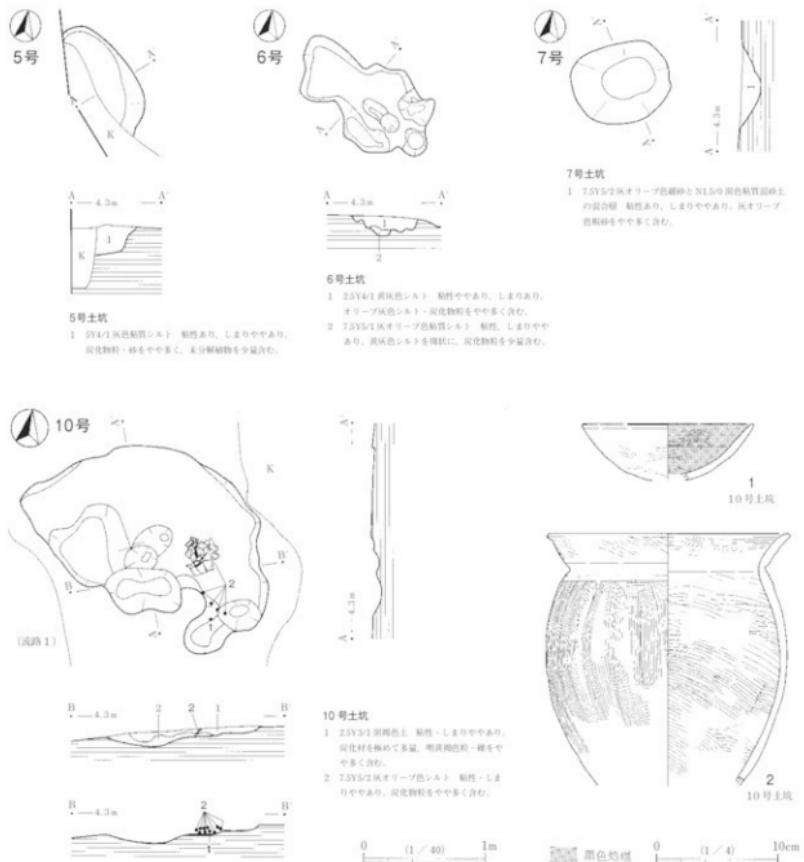
5~7・10号土坑 (第24図)

5号土坑は、Bc4-4グリッドに位置する。掘乱によって一部壊されているため、正確な規模は不明である。平面は梢円形、断面は逆台形と推測される。確認できた規模は、長軸が102cm、短軸が34cmで、検出面からの深さは22cmである。埋土は灰色粘質シルトの單一層である。遺物は、土師器壺の小片が2点出土している。内面は黒色処理されている。図化はしていない。

6号土坑は、Cc1-2~2-2グリッドに位置する。平面は不整形で、北西方に向長い。断面は箱形で、底面は凹凸がある。規模は、長軸が128cm、短軸が70cmで、検出面からの深さは16cmである。埋土は2層に分けられる。遺物は、土師器壺の小片が上層から1点出土している。図化はしていない。

7号土坑は、Cc2-1グリッドに位置する。掘り込んでいる地山にはぶい黄色砂で、平面は梢円形、断面は弧状である。規模は、長軸が80cm、短軸が66cmで、検出面からの深さは16cmである。遺物は出土していない。

10号土坑は、Cd3-3~4-4グリッドに位置する。平面は不整形で、東西方向に長い。規模は、長軸が216cm、短軸が140cmである。断面は緩やかな弧状で、底面は凹凸がある。検出面からの深さは4~12cmと浅く、埋土は2層に分けられる。その形状から、8・9号土坑と同様に、住居に伴う周溝の一部である可能性が考えられる。出土した遺物は、すべて土師器である。種別は壺と甌で、いずれも1層からの出土である。

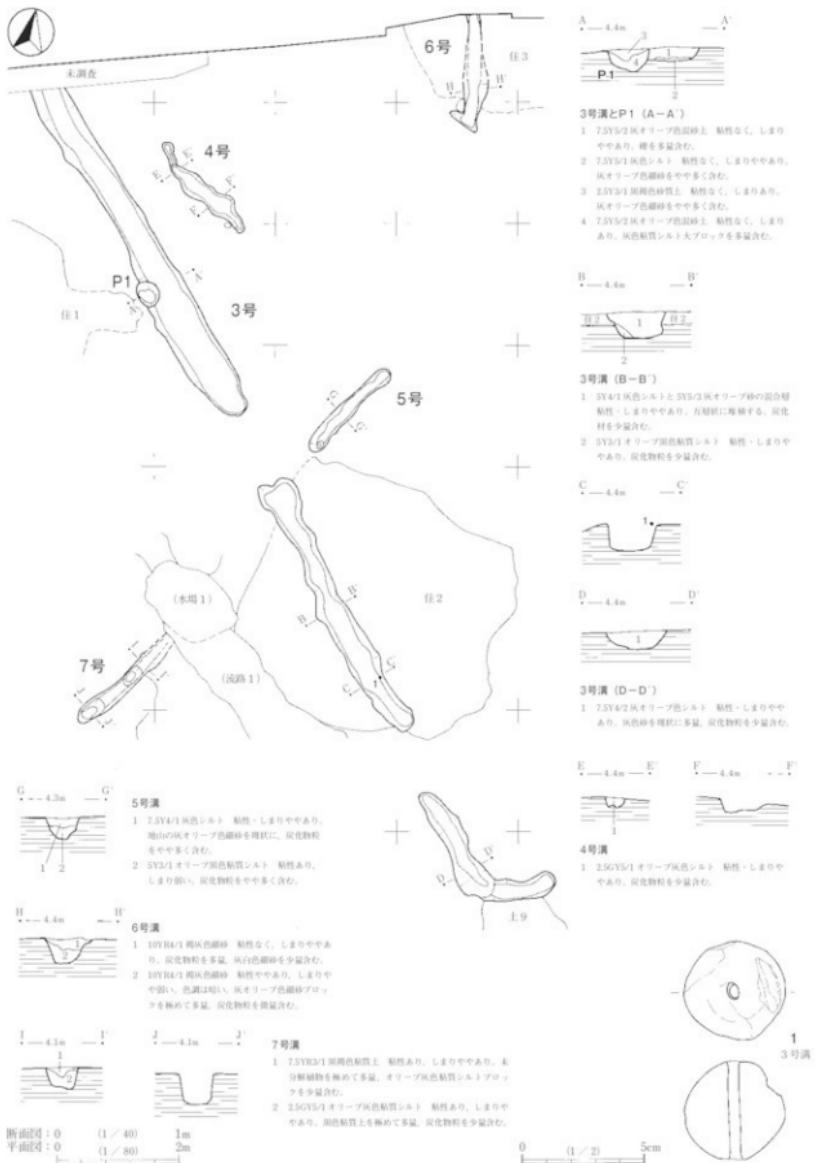


第24図 5～7・10号土坑と出土遺物

3～7号溝 (第25図)

3号溝は、Bb5-5～Cd4-2グリッドに位置する。2号住居と9号土坑を壊して掘り込んでおり、1号小ビットに一部壊されている。断続的ではあるが、北西方向へ直線状に延び、南側のCd3-2グリッドでは、直角気味に北東方向へ短く曲がる。断面は箱形もしくは逆台形で、底面は平坦である。幅は28～76cm、検出面からの深さは24～44cmである。埋土は灰色～灰オリーブ色シルトを基調とするが、地点によってその様相は異なる。遺物は、灰色シルトと灰オリーブ色砂の混合層から、土玉が1点出土した。そのほかに、土師器の壊片と甕が少量出土しているが、小片のため図化していない。

4号溝は、Cc1-1～1-2グリッドに位置する。平面はやや不整形で、北西方向に長い。断面は逆台形で、底面はおむね平坦である。規模は、長さが98cm、最大幅が21cmで、検出面からの深さは14cmである。埋土はオーリーブ灰色シルトの単一層である。遺物は、土師器がわずかに出土しただけである。小片のため図化していない。



第25図 3~7号溝と出土遺物

5号溝は、Ce2-3 グリッドに位置する。北東方向に延び、断面は逆台形である。規模は、長さが92cm、幅が14cm、検出面からの深さは18cmで、埋土は2層に分けられる。遺物は、土師器の环と甕がわずかに出土しているが、小片のため図化していない。

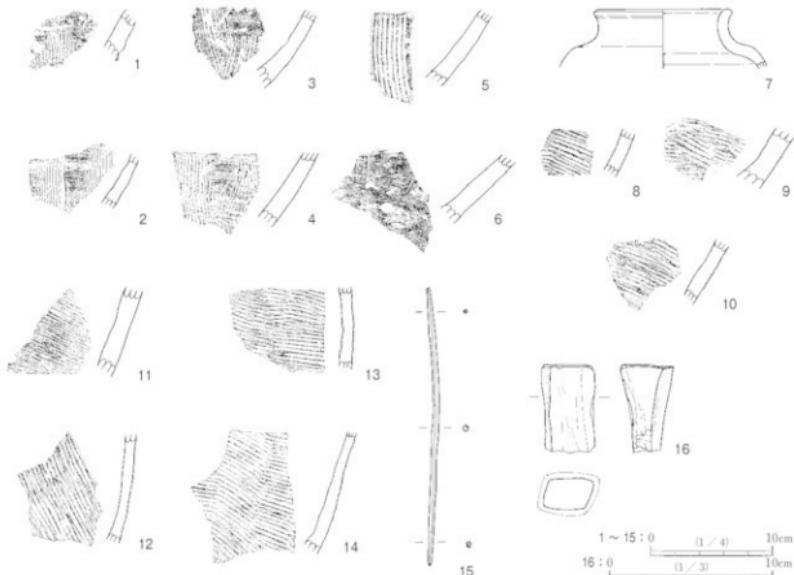
6号溝は、Cb3-5 ~ Ce3-1 グリッドに位置する。3号住居を一部壊して掘り込んでいる。なお、調査時のトレチ掘削により、プランの一部は検出できていない。南北方向へ直線状に延び、断面は逆台形である。確認できた規模は、長さ96cm、幅20cmで、検出面からの深さは20cmである。埋土は褐色細砂で、2層に分けられる。遺物は、土師器の环と甕が下層から出土しているが、いずれも小片のため図化していない。

7号溝は、Be5-5 ~ Cel-5 グリッドに位置する。8号溝を壊して掘り込んでいる。なお、調査時のトレチ掘削により、プランの一部は検出できていない。北東方向に延び、断面は箱形に近い逆台形である。確認できた規模は、長さ88cm、幅が14cmである。検出面からの深さは18 ~ 26cmで、北に向かって深くなる。埋土は2層に分けられる。遺物は、上層から土師器がわずかに出土したが、小片のため図化していない。

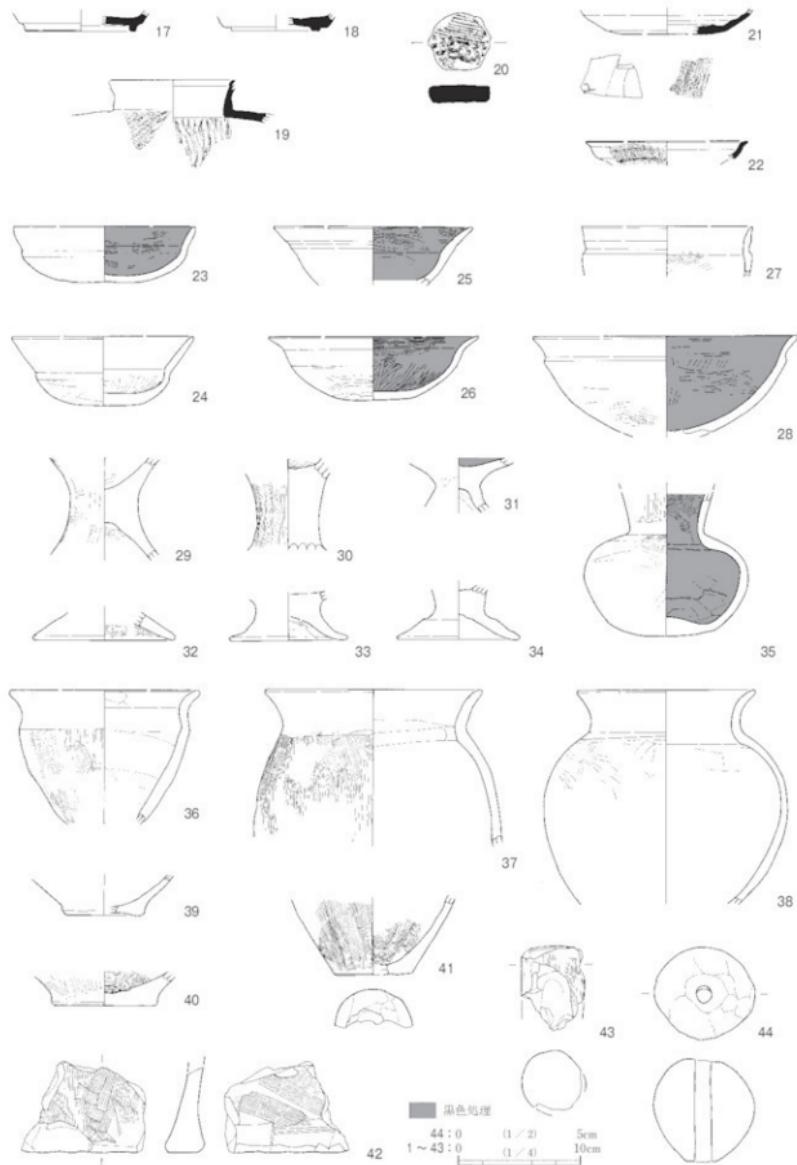
3 遺構外・攪乱の出土遺物

中世の遺物は、II層および搅乱から出土している。出土量は少なく、器形を復元できるものは少なかった。種別は、珠洲焼の片口鉢・壺・甕が主体で、そのほかに石製品の砥石や木製品の箸が出土している。

古墳時代の遺物は、いずれもIV層からの出土である。出土量は多い。種別は、土師器の环・甕・高杯・壺のほか、カマドの袖部芯材と考えられる板状土製品や土製支脚・土玉などである。また、遺構からは出土しなかった古式須恵器が2点出土している。なお、古代の遺物もわずかに出土しており、併せて図化した。



第26図 遺構外・攪乱の出土遺物（1）



第27図 遺構外・搅乱の出土遺物（2）

第Ⅲ章　まとめ

今回の発掘調査では、上層からは中世の、下層からは古墳時代の集落跡を検出することができた。当該地が、周辺と比べて、微高地で排水性も比較的良好であったため、集落が営まれたものと考えられる。ここでは、時代ごとの特徴的な遺構について、若干の検討を加えてまとめとしたい。

中世では、掘立柱建物と井戸、水場遺構などを検出した。掘立柱建物は、調査区北半の狭い範囲で、建て替えを繰り返している。ただし、いずれも部分的な検出であり、新旧関係も把握できていないことから、時期差の抽出はできていない。水利施設である井戸と水場遺構は、どちらも掘り形に裏込めを行った後、壁面を保護するため、甃は混ぜ込んだ粘質土を貼り付けていた。甃は茎に油分を含み、耐水性が高いことから、粘質土に混ぜ込むことで、保護材としての強度を強めたと推測される。遺構の配置から、集落の主体は調査区の北と東に広がると推定され、出土遺物から、その時期は14世紀～15世紀前半の中世後期と考えられる。

古墳時代では、竪穴住居と土坑、溝などを検出した。竪穴住居の燃焼施設は、2軒がカマドで、1軒が炉である。ただし、後者の住居については部分的な検出であるため、カマドと並設の可能性も考えられる。出土した土器のうち、土師器杯については、市内の同時代の遺跡である須坂橋遺跡、神明裏遺跡出土のそれと比較した場合、本遺跡出土のものに後出的要素を見て取ることができる。また、遺構外ではあるが、2号住居に近接して出土した須恵器底はTK209型式期と推測される。以上のことから、集落の時期は6世紀後半～7世紀初頭と考えておきたい。なお、2号住居では、付属施設として周溝を検出した。その形状や位置関係から、排水用や除湿用とは考え難い。今後、県内での資料の増加を待って、その性格について検討する必要があるといえる。

引用・参考文献

- 相田泰臣 2004 「越後における古墳時代後期を中心とした土器の一様相—頸城・魚沼地域の土師器を中心として—」『新潟考古』第15号 新潟県考古学会
- 岡本淳一郎 2003 「「周溝をもつ建物」の基礎的研究」『富山大学考古学研究室論集』 豊氣樓—秋山進午先生古希記念—』秋山進午先生古希記念論集刊行会
- 春日真実 2003 「越後出土の円筒形土製品・板状土製品について」『富山大学考古学研究室論集』 豊氣樓—秋山進午先生古希記念—』秋山進午先生古希記念論集刊行会
- 春日真実 2008 「越後における古墳時代～中世の柱材について」『新潟考古』第19号 新潟県考古学会
- 鐘方正樹 2003 『井戸の考古学』同成社
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸下流域を中心に—」『上越市史研究』第5号 上越市専門委員会
- 国土地理院 1993 『1:25,000 土地条件図 新発田』
- 山崎忠良 2006 「矢詰遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成17年度 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 珠洲市立珠洲焼資料館 1989 『珠洲の名陶』
- 田辯昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 鶴巻康志・吉田好孝ほか 2008 『須坂橋遺跡・神明裏遺跡 発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4集 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

遺物観察表

(確認調査)

出土地点	番号	種別	計測値 (cm)	色調・焼成・船上	調整・技法ほか	グリッド	備考
確認調査 (第3回)	1	須恵器 环盞	口径: (14.1) 器高: <3.6>	ツヤのある灰白色。焼成型頃。長石・ 白色粒を含む。	天井部と口縁部を1条の繻縫で区 別。口縁部裏面に段をもつ。	2号トレンチ。	口縁部1/8遺存。 TK10型式明か。
	2	土師器 环	口径: 18.9 器高: <5.4>	灰白色。焼成良好。石英・長石・白 色粒を多量含む。	外縁(1/13)部横ナギ。体部ヘラケイ りか。底部に被削「X」あり。内面 はミガキで、黒色処理。	7号トレンチ。	1/2遺存。

(中世)

※珠洲後編は珠洲後資料館 1989、吉岡 1994 を参照。

出土地点	番号	種別	計測値 (cm)	色調・焼成・船上	調整・技法ほか	グリッド	備考
6号掘立柱建物 (第9回)	1	木製品 柱	長さ: (45.5) ×幅: 9.6 ×厚さ: 10.9		芯持丸木取りで、稍度を残す。画面 は円形で、下端部は二方向からのナ タメケイズ。	Ce3-4・3-5. P 1出土。	柱根部遺存。
	2	木製品 柱	長さ: (45.0) ×幅: 13.6 ×厚さ: 12.4		芯持丸木取り。画面は円形で、下端 部は半円。	Ce2-3. P 3出土。	柱根部遺存。
8号掘立柱建物 (第9回)	1	珠洲焼 甕	口縁部破片	明青灰色。焼成良好。白色粒を少量 含む。	別部外縁に平行タキ。	Ch4-5. P 5出土。	古期(古)、14世紀 前半。
	1	珠洲焼 甕	底部破片	灰白色。焼成良好。白色粒を少量、雜 に微量含む。	外縁は平行タキ。内面は指揮入。	Br4-2. 6層出土。	古期、14世紀。
1号井戸 (第11回)	2	漆器 碗	口径: (12.0) 底径: (7.6) 器高: 2.8	漆木取り。高白内も含め外縁は黒漆で、赤漆の草葉文あり。内面は赤漆。	Br4-2. 逆位。 5層出土。	1/3遺存。 15世紀前半。	
	3	木製品 蓋	長さ: <7.4> ×幅: 0.7 ×厚さ: 0.3		ケズリにより。画面を多角形に成形。	Bc5-2. 3層出土。	上部遺存。
	4	木製品 蓋	長さ: <17.2> ×幅: 0.6 ×厚さ: 0.4		ケズリにより。画面を多角形に成形。	Bc4-2. 6層出土。	上下端部欠損。
	5	木製品 蓋	長さ: <7.4> ×幅: 0.7 ×厚さ: 0.3		ケズリにより。画面を多角形に成形。	Bc4-2. 6層出土。	上端部欠損。
	6	木製品 蓋	長さ: <5.5> ×幅: 2.2 ×厚さ: 0.9	漆面は漆が付く。		Br4-2. 5層出土。	
	7	木製品 曲物	径: 63.2 器高: 46.6	木頭転用のため底板は除去。側板は二重で、間に薄い板材を差し込む(5 箇所)。組合せは斜度で、それぞれ1箇所。下縁には漆が剥る。外縁の一部 に斜平行。内全面に緩平行のケビ。		木頭転用。 塗山。	
1号水堀道構 (第12回)	1	珠洲焼 甕	底部破片	灰白色。焼成型頃。白色粒を微量含む。	外縁は平行タキ。	Ce1-5.	Ⅱ～Ⅲ期、13世紀。
	2	珠洲焼 甕	底部破片	青灰色。焼成良好。白色粒・白色針 状物を含む。	外縁は平行タキ。	Ce1-5. 2層出土。	古期、14世紀。
4号土坑 (第13回)	1	土師質土器 かわらけ	口径: (8.0) 底径: (7.1) 器高: 1.5	淡黄色。焼成良好。船上は緻密で、 白色粒を微量含む。	ロクロ成形。底部は回転ヘタ切り。	Ce4-5.	1/2 遺存。
1号流路 (第15回)	1	白陶 甕	口径: (15.6) 器高: <2.5>	素地は灰白色。釉は僅に青緑色を 帯びた白色。焼成型頃。黒色粒を含 む。	口縁部は玉縁状。	Cd3-3. 1層出土 (B-B')。	口縁部1/10遺存。 大阪府左近、12世紀。
	2	珠洲焼 片口鉢	体部破片	暗灰色。焼成型頃。黒色粒を多量含 む。	様は深くて明度。一単位は11条以 上。	Cc1-5. 1層出土 (A-A')。	Ⅱ期、13世紀前半。
	3	珠洲焼 片口鉢	体部破片	赤褐色→暗灰色。焼成良好。白色粒を多量 含む。	様はやや浅く、11条まで一単位。	Cd2-3. 6層出土 (B-B')。	古期、14世紀。
	4	珠洲焼 甕	口径: (9.2) 器高: <3.5>	暗灰色。焼成型頃。黒色粒を多量、 白色粒を少量含む。	ロクロ成形。内外面に自然釉。	Be5-5.	Ⅱ～Ⅲ期、13世紀。
	5	珠洲焼 系 甕	底部破片	暗灰色。焼成良好。船上は灰黄色。 黑色粒を多量。白色粒を少量含む。	外縁は目の細かい平行タキ。内面 は指揮入。	Cd2-3. 1層出土 (B-B')。	13世紀前半。
	6	珠洲焼 甕	底部破片	青灰色。焼成良好。白色粒を少 量含む。	外縁は平行タキ。内面はナゲ。	Br5-5. 1層出土 (A-A')。	古期、14世紀。
	7	珠洲焼 甕	底部破片	暗灰色。焼成良好。黒色粒のほか、石 英・白色粒を微量含む。	外縁は平行タキ。内面はナゲ。 7層出土 (A-A')。	Cc1-5. 7層出土 (A-A')。	古期、14世紀。
	8	珠洲焼 甕	底部破片	灰白色。焼成良好。白色粒を多量、 長石を微量含む。	外縁は平行タキ。内面はナゲ。 1層出土 (A-A')。	Cd1-1. 1層出土 (A-A')。	古期、14世紀。
	9	珠洲焼 甕	底部破片	青灰色。焼成良好。白色粒を多量、 長石を微量含む。	外縁は平行タキ。内面はナゲ。	Be5-5.	古期、14世紀。

出土地点	番号	種別	計測値(cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法ほか	グリッド	備考
瀬構外・複乱 (第 26 図)	10	石製品 砾石	長さ : 12.9 幅 : 3.0 厚さ : 2.5	材質: 硅灰岩 重さ : 212.6g	表面面・左右側面に研磨痕。中底、 裏面・右側面に研磨痕。	Cd1-4, 1 層出土 (B-B')。	
	1	珠洲焼 片口跡		暗灰色。焼成良好。胎土はやや薄。 白色針状物・白色粉を多量含む。	模様は浅く、一単位 8 条以上。	Cd1-2, 複乱出土。	V 期, 14 世紀。
	2	珠洲焼 片口跡		暗灰色。焼成良好。黑色粉を多量、 白色粉を少量含む。	模様は深くで明瞭。一単位は 13 条以 上。	Bd4-2, 複乱出土。	V 期, 14 世紀。
	3	珠洲焼 片口跡		灰白色。焼成良好。砂を多量、赤色 粉を微量含む。	模様はやや浅く、一単位は 10 条以 上。	B 层出土。	V 期, 15 世紀前半。
	4	珠洲焼 片口跡		灰黄色。焼成良好。白色針状物・白 色粉・白色粉を含む。	模様はやや浅く、9 条で一単位。	Bc5-2, 複乱出土。	V 期, 15 世紀前半。
	5	珠洲焼 片口跡		灰白色。焼成良好。白色針状物・白 色粉を少量含む。	模様は深く、一単位は 7 条以上。	Bd4-2, 複乱出土。	V 期, 15 世紀前半。
	6	珠洲焼 片口跡		灰白色。焼成良好。白色針状物・白 色粉を多量含む。	模様はとてとて浅く、9 条で一単位	Cd1-4, 複乱出土。	V 期, 15 世紀前半。
	7	珠洲焼 壺	口径 : (11.4) 器高 : <5.0>	灰色。焼成良好。白色粉・黑色粉を 含む。	ロクロ成形。	Bd4-1, Cd1- 4, 複乱出土。	V 期, 15 世紀前半。
	8	珠洲焼 壺		暗灰色。焼成良好。黑色粉を多量の ほか、白色粉を含む。	外面は平行タタキ。	Cc3-4, B 层出土。	V 期, 14 世紀。
	9	珠洲焼 壺		青灰色。焼成良好。黑色粉を多量、 白色針状物・白色粉を少量含む。	外面は平行タタキ。内面はヘラナデ。	Cc1-1, 複乱出土。	V 期, 15 世紀前半。
	10	珠洲焼 壺		青灰色。焼成良好。白色粉のほか、 白色針状物・白色粉を含む。	外面は平行タタキ。内面はヘラナデ。	Bd5-3, 複乱出土。	V 期, 15 世紀前半。
	11	珠洲焼 壺		灰白色。焼成良好。胎土は細緻で、黑 色粉を微量含む。	外面は平行タタキ。内面はナデ。	Bd5-2, 複乱出土。	I ~ II 期, 12 世紀 後半 - 13 世紀前半。
	12	珠洲焼 壺		青灰色。焼成良好。白色粉を少量、 白色針状物・白色粉を含む。	外面は平行タタキ。内面はナデ。	B 层出土。	V 期, 14 世紀。
	13	珠洲焼 壺		暗青灰色。焼成良好。白色針状物・ 白色粉・黑色粉を含む。	外面は平行タタキ。内面はナデ。	Bd4-2, B 层出土。	V 期, 14 世紀。
	14	珠洲焼 壺		暗青灰色。焼成良好。白色針状物・ 白色粉を含む。	外面は平行タタキ。内面は指押え。	Bd4-1, 複乱出土。	V ~ V 期, 14 ~ 15 世紀前半。
	15	木製品 舟	長さ : 22.9 × 幅 : 0.5 × 厚さ : 0.5		ケズリにより、表面を多面的に成形。	Cd2-2, B 层出土。	
	16	石製品 砾石	長さ : (5.4) 幅 : 2.8 厚さ : 1.9	材質: 硅灰岩 重さ : 57.6g	表面面・左右側面に研磨痕。中底、 裏面・右側面に研磨痕。	Cd1-4, 複乱出土。	

(古代)

出土地点	番号	種別	計測値(cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法ほか	グリッド	備考
瀬構外・複乱 (第 27 図)	17	須恵器 有台杯	底径 : (9.2) 器高 : <1.7>	灰色。焼成良好。白色粉を多量含 む。	ロクロ成形。高台は貼り付けで、標 記あり。	Bc5-2, IV 层出土。	底部 L/4 遺存。小 泊。
	18	須恵器 有台杯	底径 : (7.2) 器高 : <1.4>	明青灰色。焼成良好。胎土はやや 薄。長石・白色粉を多量、石英を少 量含む。	ロクロ成形。高台は貼り付け。	Cd2-3, IV 层出土。	底部 L/4 遺存。同 質北周。9 世紀中葉。
	19	須恵器 櫛瓶	器高 : <3.5>	明青灰色。焼成良好。長石・白色粉 を多量、石英を少量含む。	外面は格子目タタキ。内面は当て具 痕。	Bc5-4, IV 层出土。	口縁部 L/4 遺存。 同質北周。
	20	土製品 上製品	径 : 2.5 厚さ : 0.7	暗青灰色。焼成良好。長石を少量含む。 須恵器櫛瓶の転用。	表面はカキメと 格子目タタキ。	Cd1-1, IV 层出土。	

(古墳時代)

出土地点	番号	種別	計測値(cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法ほか	グリッド	備考
1 号流路 (第 16 図)	10	土師器 甕	口径 : 17.8 器高 : <7.5>	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・芸 母を多量含む。	外面は口縁部を横ハケ後、口縁 - 制 部を斜ハケ。内面は口縁部を横ナデ す。斜部はヘラナデ。口縁 - 制部外 面に保付着。	Cd2-2 - 3-3, 1 - 6 层出土 (B-B')。	口縁 - 制部 2/3 遺存。B 层出土上破 片 - 一部接合。
	11	土師器 甕	口径 : (16.0) 器高 : <12.5>	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・長 石・白色粉を多量、芸母・赤色粉を 微量含む。	外面は制部を斜ハケ後、口縁 - 制 部を横ナデ。内面は制部を横ナデ。 口縁 - 制部上半外周に保付着。	Bc4-3 - 5-3, 7 层出土 (A-A')。	口縁 - 制部 2/3 遺 存。A 层 - B 层 出土破片 - 一部接 合。
	12	土師器 甕	口径 : (17.6) 器高 : <12.4>	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・長 石・白色粉を含む。	外面は制部を斜ハケ後。口縁部を横 ナデ。内面は口縁部を横ナデ後、制 部を横ハナデ。	Bc4-3, 7 层出土 (A-A')。	口縫 - 制部上半 1/6 遺存。溝 8 - IV 層出土破片 - 一部 接合。

出土地点	番号	種別	計測値(cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法ほか	グリット	備考
1号住居 (第18回)	1	土師器 环	口径: (17.1) 器高: <4.8>	淡黄色。焼成良好。胎土は細密。石英・白色鉱物を微量含む。	外面は体部を横ハケ窯版ハケ。その後口縁部を横ナデ。内面はミガキで、黒色処理。	Bc5-2, カマフ, 2層出土。	口縁～体部1/8造存。IV層出土破片と一部接合。
	2	土師器 环	口径: (18.4) 器高: <4.6>	暗灰黄色。焼成良好。長石を多量。石英・雲母を微量含む。	外面は体部をミガキ後、口縁部を横ナデ。内面はミガキで、黒色処理。	Bc5-2, カマフ, 1層出土。	口縁～体部1/8造存。
	3	土師器 鉢	口径: (11.7) 器高: <4.8>	褐色。焼成良好。長石・白色粉を含む。	外面は口縁～体部をミガキ後、頂部を横ナデ。内面はミガキ。内外面は黒色処理。	Bc5-2, カマフ, 2層出土。	1/8造存。IV層出土破片と一部接合。
	4	土師器 甕	底径: (5.2) 器高: <3.1>	褐色。焼成良好。石英・長石を多量含む。	外面は瓶ハケ。内面は横ハケ。	Bc5-2, カマフ, 1層出土。	底部1/2造存。IV層～8号トレンチ出土破片と同一個体。
	5	土師器 甕	口径: (15.8) 器高: <15.8>	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・赤色粉を含む。	外面は脚部の下手を横ハケ・上半横ハケ後、口縁部を横ナデ。内面は口縁部を横ナデ。脚部はヘラナシ前面に上部を弱ハケ。内面には保付着。	Bc5-2, カマフ, 2層出土。	口縫～脚部上半1/5造存。IV層出土破片と一部接合。
	6	土製品 板状土製品	長さ: <28.2> 幅: 7.4 厚さ: 4.0	に赤い黄褐色。焼成良好だがや疵有。長石・白色粉を多量のほか、石英・雲母を含む。	表面は瓶ハケナデで、一部ヘラナデ。裏面は全面的に縦ハケナデ。裏面は瓶ハケナデ。	Bc5-2, カマフ, 2層出土。	カマド補芯材料。
2号住居 (第20回)	1	土師器 环	口径: (16.1) 器高: 5.5	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・長石・白色粉を多量。赤色粉を少量含む。	外面は口縁部を横ナデ後に一部ミガキ。体部はヘラナシ後ミガキ。内面はミガキで、黒色処理。	Cc3-5, 剪裁穴, 8-10層出土。	1/3造存。往2の1・2割およびⅣ層出土破片と一部接合。
	2	土師器 环	口径: (17.8) 器高: <4.6>	灰黄色。焼成良好。石英・長石・雲母を含む。	外面は体部を横ハケ後、口縁部を横ナデと一部ミガキ。内面はミガキで、黒色処理。	Cc1-5-2-5, 1-2層出土。	口縫～体部1/3造存。IV層出土破片と一部接合。
	3	土師器 高环	底径: (11.2) 器高: <2.9>	浅黄色。焼成良好。石英・大粒の長石・白色粉を多量に含む。	外面は瓶ハケ。	Cc3-5, 剪裁穴, 11層出土。	脚部1/4造存。
	4	土師器 甕	底径: (7.0) 器高: <3.3>	灰黄色。焼成良好。石英・長石を多量。赤色粉を微量含む。	外面は瓶ハケ。内面はナデか。外面に保付着。	Cc3-5, 剪裁穴, 7-9層出土。	底部1/4造存。
	5	土師器 甕	口径: 10.4 底径: (5.0) 器高: 15.8	難～に赤い黄褐色。焼成良好。石英・長石のほか、赤色粉を少量含む。	外面は口縁部をミガキ。脚部は一部横ハケ後に全面ミガキ。内面は脚部上半と底部を横ハケ。口縁部と脚部に若干保付着。	Cc3-5, 剪裁穴, 7層出土。	2/3造存。往2の1層・カマドおよびⅣ層出土破片と一部接合。
	6	土師器 甕	口径: (18.2) 器高: <21.8>	灰白色。焼成良好。雲母を多量。石英・長石・白色粉・赤色粉を少量含む。	外面は口縫～脚部を横ハケ後、口縁部を横ナデ。内面は口縁部を横ナデ。脚部はヘラナシ。脚部外側に中位に保付着。	Cc3-5, カマフ, 5-2号トレンチ出土。	3/4造存。
	7	土師器 甕	口径: 17.6 器高: <22.8>	灰白色。焼成良好。雲母・石英・長石・赤色粉を少量含む。	外面は口縫部を横ナデ後、脚部を斜ハケ。内面は口縫部を斜ハケ。脚部はヘラナシで下部を横ハケ。口縫～脚部外側に保付着。	Cc3-5, 剪裁穴, 7層出土。	口縫～脚部3/4造存。満3およびⅣ層出土破片と一部接合。
8号溝 (第22回)	1	土師器 环	口径: (14.7) 器高: <4.6>	灰褐色。焼成良好。石英・長石を少量。雲母を微量含む。	外面は口縫部を横ナデ。体部はヘラナシ。内面はミガキで、黒色処理。	Bd5-1, 2層出土。	1/5造存。
3号住居 (第23回)	1	土製品 板状土製品	長さ: <10.4> 幅: <17.7> 厚さ: 0.9	浅黄色。焼成良好。石英・長石を多量。赤色粉を微量含む。	表面は粗面とやや内凹する。側面は研削して整形。表面は瓶ハケ。裏面は瓶ハケで、輪積み痕あり。	Cb4-5, 剪裁穴, 4層出土。	炉の部分。Ⅳ層出土破片と一部接合。
	2	土製品 支撑	ぼ: 3.2 長さ: <2.6> 重さ: 28.1g	灰白色。焼成良好。石英・長石・白色粉を多量。雲母を微量含む。	調整不明確。	Cb3-5, 6層出土。	
10号土塙 (第24回)	1	土師器 环	口径: (14.1) 器高: <4.6>	に赤い黄褐色。焼成良好。白色粉を少量含む。	外面は口縫部を横ナデ。体部はミガキ。内面はミガキで黒色処理。	Cd4-4, 1層出土。	1/8造存。IV層出土破片と一部接合。
	2	土師器 甕	口径: 20.0 器高: <20.6>	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・長石・雲母・白色粉・黑色粉を含む。	外面は口縫部斜ハケと脚部斜ハケ後、口縫部を横ナデ。内面は口縫部を横ハケ。脚部は横・斜ハケ。口縫～脚部上半外面に保付着。	Cd4-4, 1層出土。	口縫～脚部3/4造存。IV層出土破片と一部接合。
3号溝 (第25回)	1	土製品 玉	ぼ: 4.1×4.2 高さ: 4.0 重さ: 65.7g	灰褐色。焼成良好。長石・雲母・黑色粉を微量含む。	孔径は上下とも0.5cm。	Ce2-5, 1層出土 (B-B')。	完形。
遺構外・埋没 (第27回)	21	須恵器 环身	底径: (7.2) 器高: <2.8>	青灰色。焼成良好。長石・白色粉のほか、石英を微量含む。	外面は体部下端と底部を回転ヘラナシ。体部に線刻あり。	Bc5-3, IV層出土。	体部～底部1/9造存。耳環の可能性あり。
	22	須恵器 甕	口径: (13.8) 器高: <1.5>	暗灰青色。焼成良好。長石・白色粉を微量含む。	外面は口縫直下に櫛擦き波状文。	Cd2-1, IV層出土。	口縫部1/6造存。TK209式型期。

出土地点	番号	種別	計測値(cm)	色調・焼成・胎土	調整・技法ほか	グリット	参考
瀬橋外・淀丸 (第27回)	23	土師器 环	口径: (15.0) 底径: (8.4) 器高: 4.6	灰白色。焼成良好。長石・白色粉を少量含む。	外面は口縁部を横ナデ。体部は摩減により調整不明瞭。内面はミガキで、黒色処理。	Ce3-I・4-1・ 4-2・IV削出上。	1/3遺存。
	24	土師器 环	口径: (15.0) 底径: 5.4 器高: 5.7	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・砂を多量に含む。	外面は体部をヘラケタリ後、口縁部を横ナデ。内面は口縁部を横ナデ。体部はナデの後にミガキ。	Cd1-I・1-2・ IV削出上。	3/4遺存。内面黒色処理の可能性あり。
	25	土師器 环	口径: (16.3) 器高: <4.8>	に赤い黄褐色。焼成良好。胎土は細密。石英・長石を微量含む。	外面は口縁部を横ナデ。体部は摩減により調整不明瞭。内面はミガキで、黒色処理。	Cd1-I・2-1・ 2-2・IV削出上。	1/3遺存。土8出土照片と一部接合。
	26	土師器 环	口径: (17.1) 底径: (7.2) 器高: <4.8>	浅黄色。焼成良好。胎土は細密。長石・赤色粉を微量含む。	外面は口縁部を横ナデ。体部は粗いミガキで、底部はヘラケタリ。内面はミガキで、黒色処理。	Cd3-2・4-2・ IV削出上。	1/6遺存。
	27	土師器 环	口径: (14.0) 器高: <4.1>	に赤い黄色。焼成良好。石英・長石を多量に含む。	外面は口縁部を横ナデ。体部は器面が荒れたり調整不明瞭。内面は体部をミガキ。口縁部は横ナデ。	Ce2-3・2-5・ Cd1-L・ IV削出上。	1/3遺存。内面黒色処理の可能性あり。
	28	土師器 环	口径: (22.1) 器高: <7.5>	浅黄色。焼成良好。石英・輝を少量。白色粉を微量含む。	外面は体部はヘラケタリ後ミガキ。その後口縁部を横ナデ。内面はミガキで黒色処理。全面に擦れ。	Bc3-I・4-1・ 4-2・5-1・ IV削出上。	环形1/5遺存。
	29	土師器 环	器高: <8.4>	浅黃褐色。焼成良好。石英・長石を多量。赤色粉・輝を少量含む。	外面は細ハケ。内面は脚部を横ハケ。環部はヘラナデか。	Bc5-3・5-5・ Ccl-2・2-3・ 4-3・ IV削出上。	脚部遺存(脚部穴)溝8・土6出土照片と一部接合。
	30	土師器 环	器高: <7.5>	浅黃褐色。焼成良好。石英・長石・雲母を微量含む。	外面は横ハケ。内面は环部をハケ。	Bc5-3・ IV削出上。	脚部遺存(脚部穴)。
	31	土師器 环	器高: <4.5>	浅黃褐色。焼成良好。胎土は細密。長石を少量含む。	外面は摩減が著しい。环部と脚部の接合部をミガキ。内面は脚部をヘラナデで、环部を黒色処理。	Ccl-1・ IV削出上。	环体部～脚部上平遺存。
	32	土師器 环	瓶底径: (11.6) 器高: <2.3>	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・長石・白色粉を多量。雲母・赤色粉を少量含む。	外面は横ナデ。内面は横ハケ後、瓶部を横ナデ。	Bc5-3・ IV削出上。	脚部2/3遺存。
	33	土師器 环	瓶底径: 9.8 器高: <2.3>	に赤い黄色。焼成良好。石英・長石・雲母・赤色粉のほか、白色粘土粉を微量含む。	外面は横ナデ。内面はハケ後、下手～瓶底部をヘラナデ。	Bc4-I・5-2- 5-5・ IV削出上。	脚部2/3遺存。环部内面は黒色処理の可能性あり。
	34	土師器 环	瓶底径: 10.1 器高: <4.4>	褐色。焼成不良。赤色粉を多量。石英・長石・白色粘土物・輝を少量含む。	内面とも摩減により調整不明瞭。	Cd4-5・ IV削出上。	脚部充形。
	35	土師器 甕	底径: 6.8 器高: <11.8>	に赤い黄褐色。焼成良好。長石・白色粉のほか、石英・雲母・赤色粉を少量含む。	外面は脚部が粗い横ハケ後下手横ナデ。脚部はミガキをヘラナデ。内面は脚部を削ハケ。脚部はヘラナデで、黒色処理。輪積み組合せ。	Cd2-I・ IV削出上。	脚～底部3/5遺存。土2出土照片と一部接合。
	36	土師器 甕	口径: (15.0) 器高: <11.4>	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・長石・雲母・白色粉・赤色粉を含む。	外面は削部を横ハケ後、口縁部を横ナデ。内面は口縁部上手の横ナデとビーハケタリ。脚部下手はヘラケタリ。	Bc5-2・5-3・ C1-1・2-1-4・ IV削出上。	1/3遺存。
	37	土師器 甕	口径: 17.8 器高: <12.6>	浅黃褐色。焼成良好。石英・長石・白色粉を多量。雲母・赤色粉を微量含む。	外面は口縁部を横ナデ。脚部は横ハケ。内面は口縁部を横ナデ。脚部はヘラナデ。	Bc4-I・4-2・ IV削出上。	口縁～脚部上平1/2遺存。
	38	土師器 甕	口径: 14.6 器高: <17.6>	灰黃褐色。焼成良好。石英・長石を多量。雲母・白色粘土粉を微量含む。	外面は脚部をミガキ後、口縁部を横ナデ。内面は口縁部を横ナデ。脚部はヘラナデ。口縁～脚部外間に保付窓。	Cd2-3・ IV削出上。	口縁～脚部3/4遺存。
	39	土師器 甕	底径: 6.2 器高: <3.4>	に赤い黄褐色。焼成良好。長石を多量。石英・長石を少量。雲母を微量含む。	内面とも器面が荒れており。調整不明瞭。外側に保付窓。	Cd2-3・ IV削出上。	底部遺存。
	40	土師器 甕	底径: 8.4 器高: <2.4>	に赤い黄褐色。焼成良好。石英・長石を多量。白色粉を少量含む。	外面は細ハケ。内面は横ハケで一部ミガキ。	Bc5-3・ IV削出上。	脚部2/3遺存。
	41	土師器 甕	底径: 6.4 器高: <6.2>	褐褐色。焼成良好。胎土はやや細密。長石・白色粉・赤色粉を少量含む。	外面は脚部を削ハケ。底部はヘラケタリ。内面は斜ハケナデで、保付窓。	C1-5・ IV削出上。	脚下部～底部1/2遺存。
	42	土製品 板状土製品	幅: <10.2> 厚さ: 3.2 器高: <7.5>	淡黄色。焼成良好。石英・長石を多量のほか、赤色粉を含む。	外面は瓶ハケ。内面は斜ハケ後、下手端部をヘラナデ。	Cc3-4・ IV削出上。	カマド袖部芯材か。
	43	土製品 支脚	径: 5.1 高さ: <7.0> 重さ: 152.3g	灰白色。焼成良好。石英・長石を多量。雲母・赤色粉を少量含む。	外面は瓶ハケで、一部ヘラナデと指押え。	Cd2-3・2-4・ IV削出上。	
	44	土製品 土玉	径: 3.9×4.2 高さ: 4.2 重さ: 64.8g	褐褐色。焼成良好。長石・雲母を微量含む。	孔径は上手下とも0.7cm。	Cd1-I・ IV削出上。	完形。



3・5・6号掘立柱建物
(南から)



1号井戸 完掘 (北から)

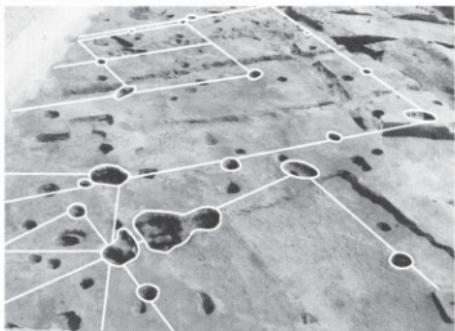


周溝をもつ住居 (南東から)
(2号住居, 8・9号土坑, 8号溝)

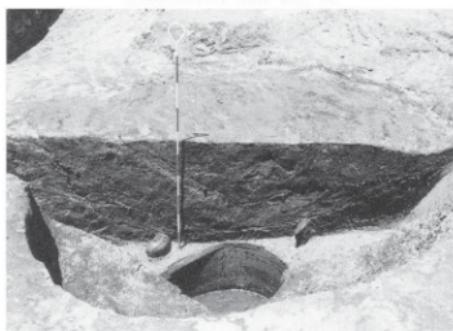
図版2 調査区（中世），4～8号掘立柱建物，1号井戸，1号水場遺構，2・4号土坑



調査区（中世）全景（南から）



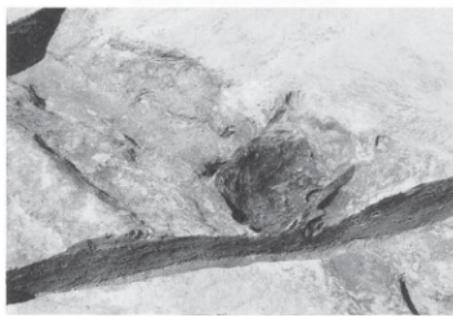
4～8号掘立柱建物（北から）



1号井戸 土層断面（南東から）



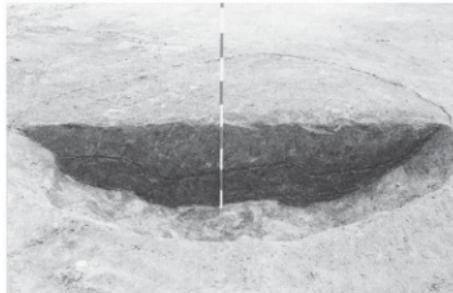
1号井戸 掘り形（北から）



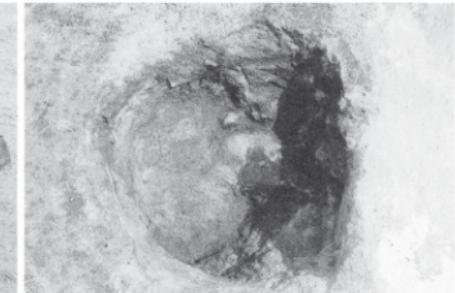
1号水場遺構と1号流路（南から）



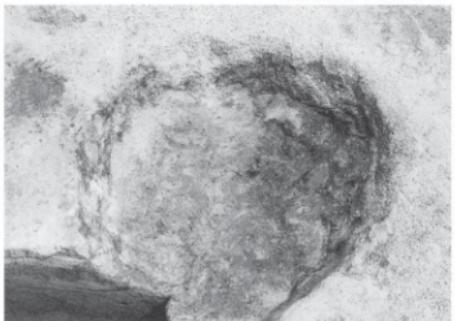
1号水場遺構（北西から）



2号土坑 上層断面（南西から）



4号土坑（南から）



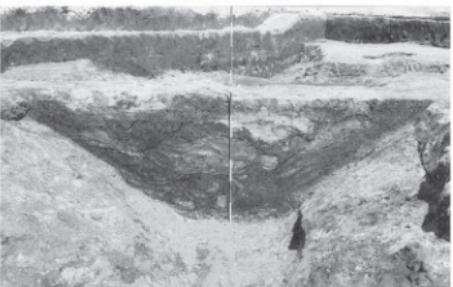
3号土坑(南から)



1号溝(南東から)



1・2号流路(北西から)



1号流路 土層断面(A-A')(南東から)



調査区(古墳時代)全景(南から)



1号住居(西から)



1号住居カマド 遺物出土状況(南東から)

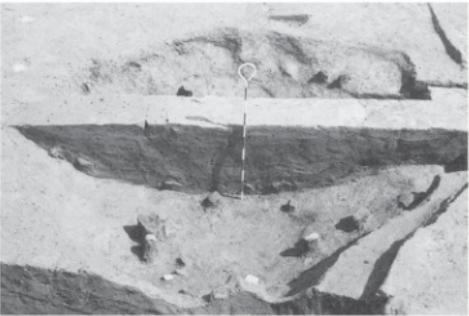


2号住居(南東から)

図版4 2・3号住居, 8・9号土坑, 8号溝



2号住居カマド（北西から）



2号住居貯蔵穴 土層断面（南から）



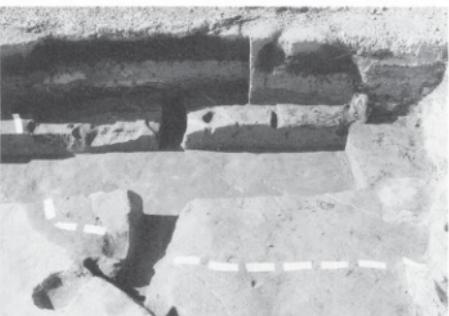
8号土坑（南から）



9号土坑（南から）



8号溝（北から）



3号住居（南から）



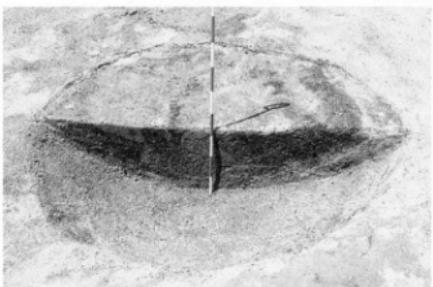
3号住居 土層断面（南から）



3号住居炉 遺物出土状況（南から）



6号土坑（南から）



7号土坑（北東から）



10号土坑（南から）



10号土坑 遺物出土状況（南から）



3号溝（南東から）



5号溝（北東から）

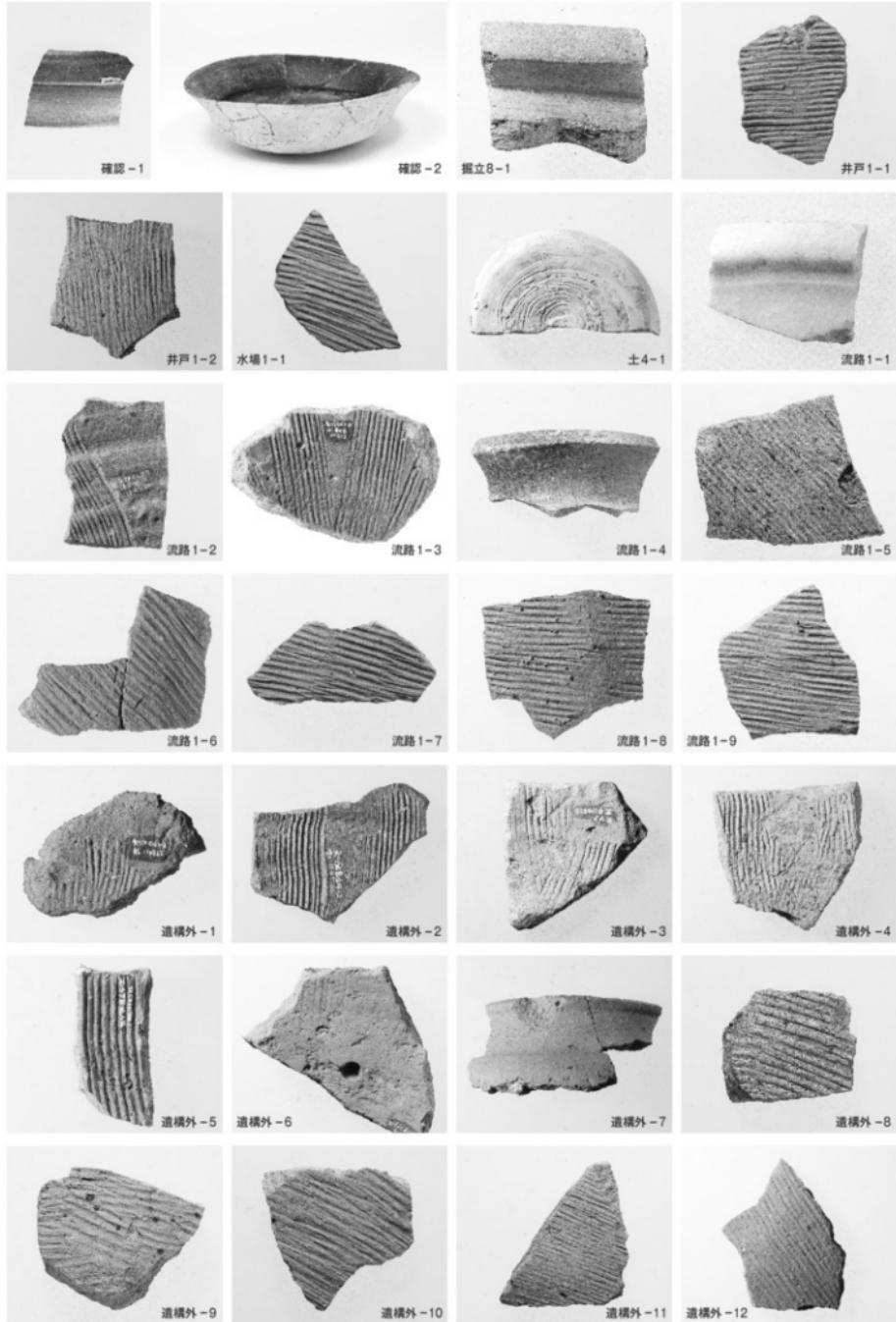


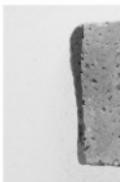
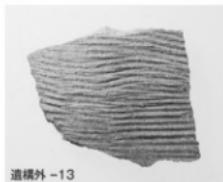
4号溝（南東から）



7号溝（南西から）

図版6 確認調査の出土遺物、中世の出土遺物（1）



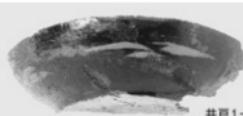


井戸1-3

井戸1-4

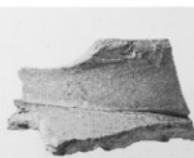
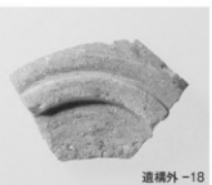
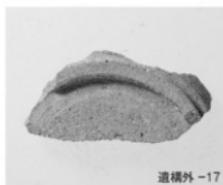
井戸1-5

道模外-15



井戸1-6

流路1-10



道模外-17

道模外-18

道模外-19

道模外-20



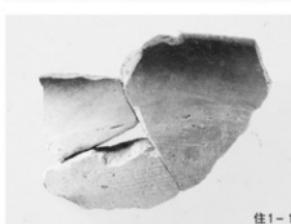
流路-11



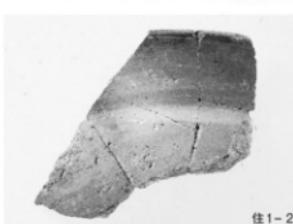
流路-12



流路-13



住1-1



住1-2



住1-3

図版8 古墳時代の出土遺物（2）



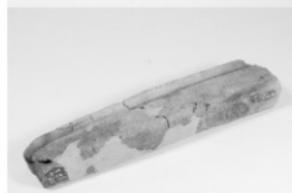
住1-4



住1-5



住2-5



住1-6



住2-1



住2-2



住2-6



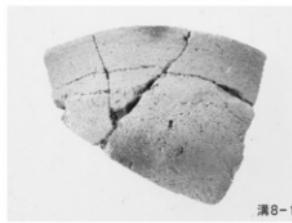
住2-3



住2-4



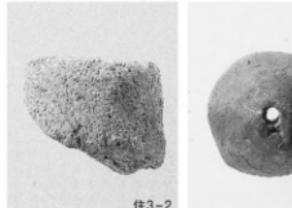
住2-7



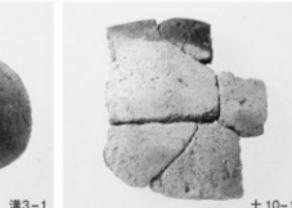
溝8-1



住3-1



住3-2



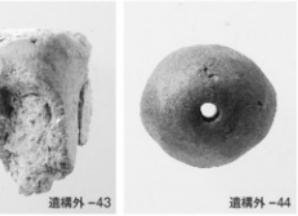
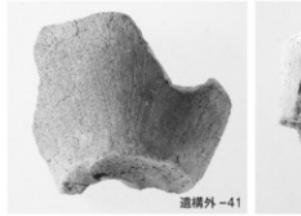
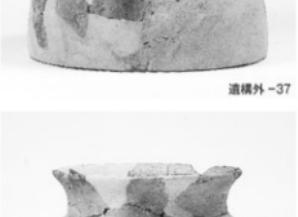
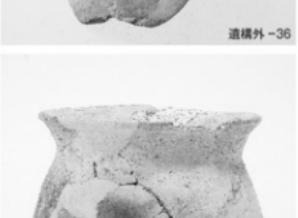
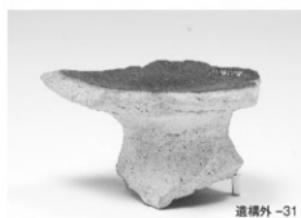
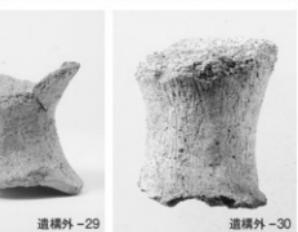
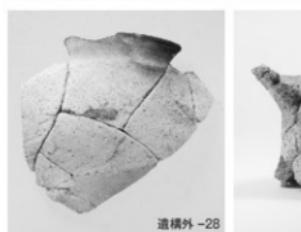
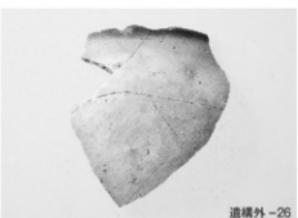
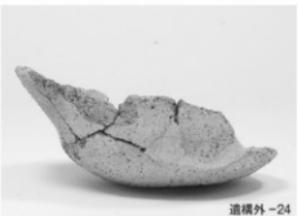
溝3-1



土10-2



住3-1



造模外 -38

報告書抄録

ふりがな	やづめいせき							
書名	矢詰遺跡 発掘調査報告書							
副書名	工場建設用地の造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第47							
編著者名	津田憲司							
編集機関	新発田市教育委員会（教育部 生涯学習文化行政室 埋蔵文化財係）							
所在地	〒959-2323 新潟県新発田市乙次281番地2 TEL 0254-22-9534							
発行年月日	平成24(2012)年3月21日							
体裁	A4判 横組1段 本文32頁 写真図版9頁							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢詰遺跡	新発田市奥山新保字矢詰406番1ほか	15206	661	37° 95' 76"	139° 29' 60"	20110517～20110726	367m ²	工場建設用地の造成
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落跡	中世 (室町時代)	掘立柱建物8棟、 井戸1基、 水場遺構1基、 土坑4基、溝2条、 流路2本	白磁、珠洲焼、 土師質土器、漆器、 木製品(箸、櫛ほか)、 石製品					
集落跡	古墳時代後期	竪穴住居3軒、 土坑6基、溝6条	土師器、須恵器、土製品					
要約								
調査の結果、矢詰遺跡は中世と古墳時代後期の集落跡であることが明らかとなった。中世では、掘立柱建物の建て替えを繰り返して集落を営んでいた様相が明らかとなった。また、井戸や水場遺構の水利施設は、構造が特徴的であり注目される。古墳時代後期では、竪穴住居を3軒検出した。燃焼施設として2軒はカマド、1軒はかがをもつ。また、1軒は住居の周りを部分的に周溝が巡っていた。低地における住居の構造を考える上で、貴重な事例といえる。								

矢詰遺跡 発掘調査報告書

工場建設用地の造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 平成24(2012)年3月21日

新発田市教育委員会

新潟県新発田市乙次281番地2

印刷 株式会社 天野印刷